



薊色 花伝

よるざや薊堂

Azami iro Kaden

1. ある春の日

空いた左手に地図を掲げて、交差点を眺めていた。

春先だというのに太陽が忌々しいほど揚々としている。約1年袖を通したセーラー服は冬使用で、陽射しに似合わない濃紺色が重苦しい。

背負っているのは大きなスポーツバッグ。右腕には、愛用の指定カバン。

「あーもう、暑いなあ、北ってどっちだったかなあ……」

外回り中のサラリーマンが、重装備の私を横目で見ながら何事かと通り過ぎていく。祖父に貰った手書きの地図を頼りに向かう先はもうすぐのはずだった。それを裏付けるように、足を進めるうちに臃げな懐かしさが浮かび上がってくる。

「そろそろのはずなんだけど……見えた」

やがて現れたのは紺青の屋根、時代錯誤な煉瓦造り。小さいながらもビルの合間に自らの存在を主張する建物は、まるで現代から切り離されているようだった。

正面の扉は鍵がかかっていたので、預かってきたマスターキーで扉を開ける。

木製の戸を押し開く。一気に陽光が雪崩れ込んだ。薄暗い室内には僅かに埃が舞い宙に影を晒す。

「おじゃましまーす」

屋敷の中は入ってすぐがエントランスホール。右手にはカウンターがあって、頑丈そうなフロントデスクの上には金色の呼び鈴。私はそれに見向きもしないで階段を昇る。そして突き当たり、正面の扉へ。

扉の向こうは洋室だった。屋敷の外観にぴったりの広い応接室だ。奥行き二十畳ほどで、その果てには天井までのガラス窓。両側には蔵書棚が並び、部屋の中央には来客用のソファと机が添えてある。

奥には現役当時祖父が使っていた執務机が見える。幼い頃に数えるほどしか遊びに来ていないけれど、その様が鮮明に思い出される。私はソファのひとつに鞆を放り出して、その隣に身体を沈めた。

天井を見上げる。硝子製のシャンデリアが太陽光を反射している。カーテンはきちんと開け放されていて部屋の中は明るい。

建物の中は静かなものだ。線路も大通りからも離れているから、騒音が遠い。

座り心地の絶妙さと朝の早起きと、2時間の電車旅がうとうとと目を閉じさせる。上階にあがるのは後にして…少しだけ。

そのまどろみを留めたのは、ひとつの明瞭な声。

「誰？」

心臓の跳ね上がる心地で目を開ける。いつの間にかテーブルを挟んだ向こうに男が立っていた。部屋には誰も居ないと思っていたのに、いつ入ってきたんだろう。返事を返せないうちに、向こうが再び口を開く。

「お客さん……じゃないよね。鍵は閉めていたはずだし」

こちらを見ているのはどこかで会ったような青年だ。右手にはハタキ、左手にはバケツ。スラックスにワイシャツという出で立ちのまま、腕まくりをしてそれらを携えている。

「もしかして、桂一朗さんのお孫さん？」

余り毛を括っていた髪ゴムを解きながら、翠仙ちゃんだっけ、とひとり納得したように頷く。

「大きくなって分からなかったよ。ああでも、目元には面影があるね」

「あんたこそ、誰なの」

私はソファに身体を預けたままで尋ねた。どっちが不審者か分からない状況で、どちらも怯むことすらしない。相手は余裕ある微笑みさえ湛えている。

「僕は常葉。この建物の管理をしてる、薊堂唯一の社員」

トキワ。そういえば――遠い記憶の中で祖父が呼んでいたような気がする。ということはこの場合不審者は私のほうらしい。

私……いいえ、あたし・浅見翠仙のほうか。

ふと思い出すのは、はるか遠い記憶の中にあった、トキワという名前と祖父との繋がり。

当時も社員の数は多くなかった記憶があるけれど、祖父を社長としてこの場所は確かに機能していた。

小さいながらも活気溢れる、穏やかな空気の流れる事務所。その中で祖父が呼ぶ名前のひとつ。常葉。

たしかに、会ったことがある、気がする。ろくに思い出せていない面影を彼の表情の中に探す。

――それにしても。

それにしても、若い。いつ頃からの社員なのか知らないけれど見た目は二十代、せいぜい二十代後半といったところではないだろうか。

少しだけ長い襟足、日焼けとは無縁そうな白い顔。黒よりは茶に近い目の色。顔立ちは…一般的に言って整っているほうだと思う。

「管理って、もしかして住み込み？」

あたしはとりあえず行儀良く座りなおして彼を見上げた。本当は立ち上がったほうがいいのかもしれないけれど、『常葉』さんも何も言わないので気付かないふりをしておく。

「うーん、ちょっと違うかな。一応近所に自宅があるし」

言いながら、下ろしたバケツの中に雑巾を放る。どうやら掃除のほうは殆ど終わりらしい。

「それで、今日は一人でどうしたの」

まるで御遣いに来た孫に話しかけるような気軽さで彼は言う。半分は合っているようなものだけれど、もう半分はおそらく、彼が思っているほど簡単なものではないだろう。

「おじいちゃんから聞いてないの？」

「何を？」

あたしは一瞬だけ彼から視線を外した。

「……薊堂が、なくなるかもしれないってこと」

常葉の表情に変化は無い。代わりに、ああ、と今思い出したと言わんばかりに頷く。

「なんとなく聞いているよ」

「貴方はそれでいいの？」

「桂一郎さん——先代がそう決断するなら、仕方無いことだよ」

手ごたえの無いリアクション。職場の危機だというのに残念そうでもない。受け入れる覚悟が出来ているのか、彼にとってそんな簡単な問題でもないはずなのに。

常葉は執務机のほうへ向かい、今は誰も使用していない閑散とした机の上を整えた。その鷹揚とした様子を見てしまうと...まるで納得してしまったような表情を見てしまうと、あたしが次に言おうとしていることさえも躊躇われてしまう。

けれど、言わなければならないのだ。

でなければ、あたしが今日ここに荷物を抱えて来た意味がないのだから。

「……実はね」

静かだった室内の空気を、あたしの声が震わせる。それに気がついたのか常葉が振り返る。「実は、どうせいつか無くなってしまうのならあたしがやってみないかって言われて、ここに来たの」

そこまで一気に口にすると、また部屋の中が静かになった。互いの視線が交差する。言ってしまった手前、逸らすことが出来なくて彼の行動を待った。

すると常葉は、ふうん、と分かったのか分からないのかが判らない反応をした。軽く頷いて、テーブルランプの角度を直す。ただ、それだけ。

「なにか言ったらどう？」

「なにかって？」

今度は振り向かないままで声だけが返される。動揺ひとつ窺えない。あたしのほうが不安になってしまう。

「急にやってきた小娘が、今日から社長になりますって言ってるのよ。嫌じゃないの？ 邪魔じゃないの？」

まくし立てる様に言う。何事もない返答。

「だって、桂一朗さんが決めたことなんだろう？ 僕は社員だから、異存は無いよ」

変な奴だ。今はっきりと確信した。

どうしてそこまで祖父を信用出来るのだろうか。どうしてそこまで無頓着を貫けるのだろうか。今のあたしの一言は、今までの彼の平穩を大破させる衝撃だったはずなのに。

啞然としていると、一通り役目を終えたのか、彼は再びソファへと戻ってきた。

目が合う。ああ、今気付いた。陽射しの下だと彼の瞳は琥珀のような輝きをさせる。その中に少し、気迫のようなものを感じて。

「もっとも、前社長……キミのお父さんのこともあるから、『やれるものなら』としか言いようがないけれど」

言葉には目に見えて揶揄が込められていた。祖父を先代と呼び、父のことを前社長と呼ぶ理由をあたしは知っている。

「あたしと父親は違う」

「うん。だと嬉しいね」

相変わらず笑顔にプレッシャーが上塗られている。爽やかさだけでない、何か強い色だ。

「キミにやる気があるのなら、僕は全力で手助けさせてもらおう。キミが『馨さん』と同じなら、僕は黙って潰れるのを待つだけだ。これでいい？」

それは警告だった。あたしに対する挑戦状と言ってもいい。

彼は小娘が侵入したのを見逃したわけでも赦したわけでもなかった。侵入するに見合った存在なのかを見極めようとしていたのだ。

しかもそれらは全て、向こうの余裕の上に成り立っている。

彼は言う。『続けられるだけの度量があるのなら』と。

そうと分かれば、こちらだって遠慮する由縁はない。あたしがこの場所に居続けるための条件が、彼を納得させればいいということならば。

「もちろんよ」

あたしは深く頷いた。もうこの重い鞆を背負って、自宅へ引き返すつもりは無いのだ。あたしはあたしであって、迷子の少女ではない。

決断を出来るくらいには、一步でも祖父に近付きたい。

この日から、浅見翠仙の『社長アルバイト』は開始された。

目を開けば燦々と差し込む陽の光。ぼんやりと身体を起こして、あたしは自分のことについて考える。

自分の部屋じゃ、ない。それに、見下ろす四肢は何故だか制服姿のまま。

改めて辺りを確かめてみる。オフホワイトの壁に、真鍮柵のベッド。サイドテーブルの上にはガラスのランプ。真っ白のクラシカルな据え置き電話。カーテンとテレビは新しいデザインのものだけれど、そのどれも馴染んだものではない。

それからやっと思慣れたもの――足元に投げ出したスポーツバッグを見て、やっと思がどうなっているのかを理解する。

そうか。あたしは薊堂に来たんだ。

売り言葉に買い言葉で、なんとか薊堂を引き継ぐことになったのは昨日の出来事。それから夕方までのことを、ゆっくりと思い出していく。

見渡した部屋は寝泊り用の三階の住居スペース。洋風の六畳間がひとつと給湯室並のシンク、年代モノの割にしっかりしたバスルームがある位だけれど、広さとしては都内の平均的なアパートと大差ない。むしろタダ同然で住まわせてもらうのだから申し分ない限りだった。

半開きのカーテンを開け放して、真っ青な空を見上げる。南向きの窓はちょうど立ち並ぶ建築

物の合間を縫って太陽を提供してくれる。充分眠ったはずなのに、目が痛い。

これからあたしはここを住処にして生活していく。学校に通うのもここからだ。ちなみに実家から高校までは電車で1時間くらい。通えない距離でもないかもしれないけれど、通いたくない理由があるのだから仕方無い。それに高校には断然こっちのほうが近い。

やっと一步を踏み出した充足感。やっと一步近づけた安心感。それを春の日差しと共に吸い込む。

昨日は確か、トキワという薊堂社員兼管理者と話をつけて、その足でこの部屋に来たんだ。まだ日が暮れ始めたばかりだというのに疲労が酷くて、ドアを閉めた途端に眠気が風船のように膨らんだ。

初めて入ったこの部屋は、祖父が仮眠用に使っていたのだとか。

長いこと使われていなかった割に綺麗なのはやはり常葉のお陰だろうか。あとでお礼を言っておいた方がいいかな。

そんなふうに考えながら制服のままベッドに突っ伏して……そこからの記憶が無かった。

つまりは、そのまま眠ってしまったというわけ。

社長就任初日。けれど今日は日曜日だし、当分新学期も始まらないのですることも無かった。時計を見れば7時で、なんとなく身支度をする。髪を梳かしながら窓から下を眺めれば、裏の小さな庭に祠のようなものが見えた。昨日は気づかなかったけれど土地の守り神だろうか。あとでちゃんとお参りしておかないと。

制服はシワだらけにしてしまったので、持ってきた着替えに袖を通す。部屋着のつもりで持ってきたからいまいち締りがない。荷物が届くまでは我慢かな。

木製のドアを開けて廊下へ。エントランスホールは三階まで吹き抜けになっていて階下が見下ろせる。全く変わった建物だわ。疑洋風建築とか聞いていたけど、内側はそれとも少し違うような。明治からある建物らしいけれど幾度か手も加えられているんだろう。

そんな風に二階へ降りていくと――既に彼の姿が在った。

「あ、翠仙ちゃん。お早う」

階段の手摺を磨いていた『常葉』が振り返る。昨日と変わらない爽やかさがあたしを迎える。

「…早いね」

「言っただろう？　すぐ近所に家があるって」

管理者とか社員とか良く分からないけれど、彼が仕事熱心なのはよく分かった。

だいたい、お父さんがこの店を放り出してからは仕事なんてほとんど無かったはずなのだ。それとも、あたしが始めると言ったから自分の業務を再開しているのだろうか？　もしかして、毎日こうして掃除をしていたとか――まさかね。

ふと、お醤油と味噌のいい香りが漂うのに気がついた。どうやら匂いの元は応接室らしい。昨日の夕方から何も食べていないから、まるで消化器官に直接働きかけるかのような攻撃力だ。ふわふわしていた頭も急に冴えてくる。

「どうせ朝ご飯も準備してないと思ってさ。持ってきたから食べるといいよ」

手招きされて入った先には来客テーブルの上に並べられた朝餉の用意。つやつやのご飯に赤味噌のお味噌汁。タッパーからお皿へ装われる御浸しに卵焼き。アジの開きはまだ湯気が昇っていて、大根おろしまで添えてある。

判で押したみたいなの、完璧な和食の朝ご飯。もしかしなくても目の前の彼が作ったに違いない。言いたいこともあったけれど、お腹が空いているのも事実なので静かに戴くことにした。

あたしが箸を取ったのを見て、常葉は安心したのか掃除へと戻って行った。

それにしても、なんて穏やかな朝なんだろう。

環境が違うだけでこんなに平靜な気持ちでいられるのなら、もっと早くこっちに来れば良かった。祖父の助言に感謝しながら、テーブルの前で両手を合わせた。

朝食を摂り終える頃には建物内の掃除も佳境にさしかかっていた。何か手伝うことはないかと一階に降りていくと、常葉はカウンター横に立てかけてあった木の板を担いだところだった。

板を抱えて玄関の外へ。そうして、観音開きの扉の上にそれを翳す。

表面に書かれていたのは懐かしい文字だった。木目の鮮やかな一枚板。

その上に墨字で力強く、『あざみ堂』の文字。

「看板を掲げるのも久しぶりだ」

朝陽の下で、常葉が感慨深く呟いた。

2. 薊堂の仕事

「普段はどんな仕事をしていたの？」

控え目に来客用のソファに腰掛けて、事務机で何か書き物をしているのを見守る。応接室に入っただけで、脇に添えられた机に向かう姿は役人付きの秘書みたいだった。事実、あたしが社長だとするとこの青年は雑務兼助手兼第一秘書というところなのだろうけど。

「色々だよ。悩み相談とか失せ物探しとか。素性調査のようなあまりに探偵業っぽいことまでは請け負っていないけれど。『馨さん』が辞めてからは先代経由で来た依頼をたまに受けるくらいだったかな」

「悩み相談って、本当に来るの？」

「来るよ。余所では中々言えないことだから、わざわざ遠くから足を運ぶ人も結構居たね」

ふーん、と適当に相槌を打って、ソファの上に寝転がる。見上げた天井のシャンデリアがきらきらと輝いている。

「それじゃあ本当なんだ。おじいちゃんも妙な仕事をしてたものね。まさか、『妖怪退治』なんて」

『薊堂は狐憑き』。

ここに来る前に父親があたしに吹き込んだ言葉だ。てっきりこの会社を毛嫌いした果ての出任せだと思っていたのだけれど、どうやらそうでもないらしい。

「妖怪退治だなんて、人間きが悪いね。霊障相談と言ってくれないかな」

視界の端に常葉の苦笑する様子が見えた。何に苦笑したのかは定かじゃない。あたしはちらりと彼を仰ぎ見ながら、構わずに続けた。

「摩訶不思議なものを解決するんだから、どっちだって同じでしょ」

「不思議なもの、か。キミは信じてるほうなの？」

興味の強い視線を感じて顔を向ける。彼は手を止めてこちらの様子を窺っていた。

「信じてるとか、そんなー」

ふと、階下で呼び鈴が鳴る。

あたしが反応する前に、助手は慣れた様子で立ち上がった。

「これ、なんですけど」

三十代くらいの女性が持ってきたのは一枚の古ぼけた写真だった。どうやら祖父の紹介で持ち

込まれた仕事らしい。常葉が対応しているのを、後ろからそっと覗き込む。

写真の中央には男性が一人写っていた。モノクロだからいくらか判別し辛いけれど、何処かの洋館を背後にした普通の記念写真のようだ。その一角を指差しながら、依頼主の女性は怯えたように囁く。

「――ここに、こっちを見ている女性の顔が、あるように見えるんです」

男性の後ろ、屋敷の裏の森と外壁の境。一見何ともないように見える写真の右端だった。

まるで口にするのも憚られるといったふうに、肩を竦めて目を逸らしてしまう。あたしと常葉は写真の表面をじっと見る。確かに、壁の影になっているところに人影があるようにも見える。しかし言われないと気付かないほどに曖昧で、残念ながらあたしには性別までは判断できなかった。

けれど、この写真。なんだかおかしい。

「お願いできますか？」

常葉は暫く写真を見分して、わずかに眉をひそめた。それからすぐ穏やかに微笑む。

「分かりました。こちらでしっかり御焚き上げしておきます」

女性は憑き物でも落ちたような晴れやかな表情で薊堂をあとにした。何度も何度も頭を下げる姿と、丁寧に会釈を返す常葉の様子を後ろから窺った。

客人の帰った応接室。温くなった緑茶を片付ける青年に、あたしは違和感が拭えずに尋ねる。

「これって本物？」

テーブルの上に置きっ放しの袱紗。その中に収められたままの一枚の写真。

常葉は軽く頭を振った。

「違うね。昔の写真は陰影がはっきりするから、ただの陰が妙な形に見えやすいんだ。それに人間の脳は、三点あれば人の顔と認識する仕組みになってる」

あたしは彼の言葉に啞然とした。

「本物じゃないのに引き受けるの？ それじゃ詐欺じゃない」

「だから料金は安いだろう？」

表情を変えることもない。多分、こういった依頼も少なくないのだろう。勿論あたしとしては『本物の』依頼が沢山来られても嬉しいことなんてないのだけれど。

ぼんやりとしていると、常葉は新しいお茶を淹れ直してくれた。

「それにこういうのは、映っているものよりも依頼主の不安を取り除くことのほうが大切だから」

ふいにその横顔を見詰める。かすかに微笑んだ口元、瞳。それはどこか誇らしげな色をしている。

ああそうか、彼はこの仕事に自信を持っているんだ。

もしかしたら、彼がこの場所に留まる理由もそこにあるのかもしれない。

「って、先代の受け売りだけだね」

あたしの視線に気付いてか、彼はほんの少しだけ照れたように眉を寄せた。

薊堂を再開させて既に三日。初日に心霊写真まがいの依頼が来た以外は平和な毎日が続いていた。

広い窓からは揚々と春の日差し。敷地内に桜の木はないはずなのに、どこからか迷い込んだ花弁が窓の外を流れていく。

——今日も暖かいなあ。

「翠仙ちゃん、紅茶と珈琲と煎茶、どれがいい？」

春休みの課題を広げていると、ソファの向こうから呼びかけられた。

「ええと。じゃあ、紅茶」

「良かった。珈琲って言われたらどうしようかと思った」

実は今切らしてるんだ、と首を竦める。ところでその紅茶はちゃんと飲めるものなのだろうか。茶葉にだって賞味期限はあった気がするのだけれど。

今日も特に用事のないまま、応接室に居場所を落ち着けている。結局のところお店の殆どは常葉まかせなのであたしは座ってるくらいしかすることがない。

部屋に下がっても出掛けてもいいと言われたけれど、さすがにそうもいかない。それに、今の所この建物の中では、幼い頃に馴染んだこの部屋が一番居心地が良いこともある。

「そういえば、新学期はいつからなんだっけ？」

まだ半分も空欄のテキストを覗き込みながら常葉が尋ねる。あたしは背筋を伸ばす。まるで油切れでも起こしたブリキのおもちゃのように動きが悪い。

「来週から。学校が始まったら日中は貴方に任せることになるけど、それでいい？」

「勿論、留守は受け持つよ。それに暫くは開店休業だろうしね」

「やっぱり昔は忙しかったの？」

紅茶の香り確かめながら彼に問う。とりあえず飲んでも平気そうだ。

「うーん、どうだろう。仕事も先代——桂一朗さんの気紛れみたいな所があったから」

常葉は軽く首を傾げた。謙遜というよりは本当に思い当たらないという感じ。

ふと、祖父の微笑を思い起こす。ふわりと笑うのにどこか鋭い、それでいて屈託のない微笑。社長然とした、従うことに戸惑いを憶えさせない瞳。本人曰く『引退した』今は現役より鋭角さも緩んだものの、瞳の色だけはいつまでも褪せない。

幼さを脱した今だからこそ、あの人の偉大さはひしひしと伝わってくる。

そんな祖父が留めた大事な場所。大切な空間。

「気紛れ、ねえ。なのにどうして貴方はこんな店で働いてるのかしら……あ、そういえば」

あたしはふと、テキストから目を放して常葉を見た。彼はちょうど自分の紅茶を事務机に置いたところだった。声が自分に向けられたものだと気がついて振り返る。

「あたし、あなたの下の名前知らなかった。何て言うの？　ここでどれくらい働いてる？」

予想のつかない質問だったのか、僅かに表情が呆ける。あたしはちょっと気分を悪くする。そんなに、小娘が質問するのは邪魔なものだろうか。一緒の職場で働く者同士なのだから、素性に興味を持ったって構わないはずだ。

あたしの不機嫌が通じたのか、常葉は可笑しそうにくすりと笑う。

それからゆっくりと口を開いて、

「僕は……」

リーン。

声を遮るように、一階でベルの音がした。来客が鳴らすカウンター上の呼び鈴だ。立ち上がるうとすると、常葉がそれを片手で制する。

「僕が出るからいいよ」

椅子に腰を落ち着け直して、少し眉を寄せる。

なんとなくだけれど、音より一瞬早く常葉が視線を向けた気がしたのは気のせいだろうか。

依頼先は郊外の森奥にひっそり佇む洋館だという。

根を詰めたような依頼主の男性と常葉との遣り取りを見守って、静寂の戻った執務室で彼に聞いた。

仕事の内容は、実際に足を運ばなければならないもの——つまり、こちらに運ぶことが出来ないものの鑑定。約束は明後日に取り付けていたけれど、それをどうするか、という確認があたしには向けられない。

「あたしも行く」

「僕だけで大丈夫だよ。それに、キミじゃ危ないよ」

白磁の茶器を片付けながら常葉が愛想笑った。片手間で流された言葉に思わずむっとする。

こういうときに身に浸みて理解するのだ。常葉はあたしを信用していない。

彼はあたしを社長として、或いは社長見習いとして此処に受け入れた訳じゃない。ただ単に子守か何かのつもりで一時的に預かっているとか、その程度の気持ちでしかない。

それが悔しいし、情けない。

どうせあたしは子供で、頼りになんてならない。最初から頭数にも入っていないんだ。だから。

「言っておくけど、あたしだっておじいちゃんと同じ血が流れてるのよ」

立ち上がって、彼が下げようとしていたクッキーを一枚奪う。それによってやっと、注意をこちらに向けることに成功する。

面食らったように肩ごしにあたしを見る。表情の分からない無表情がいつそ心地良かった。

「それに、今はあたしが薊堂の社長なの。ついて行かないでどうするの」

虚勢のつもりは無かった。認められたいわけでもない。ただ、あたしの上を視線がすり抜けるのだけは嫌だった。

常葉の瞳があたしを見定めるように一透き通ったように、見えた。

3. 華崎邸

「先日はありがとうございました。私、薊堂の社員で常葉と申します」

出迎いの面々を前にして常葉は丁寧に頭を下げる。

社長就任五日目。隣県との境目に位置する山村の更に奥。まさにお金持ちの別荘のような洋館が木々の中に埋もれていた。実際にこの屋敷の持ち主は華崎氏といって、家計図が何百年と辿れる貴族由来の家柄らしい。

店で仕事をしているときより幾らかピシリとしたスーツ姿の常葉の後ろで、あたしはいつものセーラー服で佇む。依頼人の視線が怪訝げに向いたのに気付いて、知らない振りで見送りを見渡す。

冴えた緑色が周囲を支配する。

この辺りはなんとなく祖父の故郷に似ている。つまり我が家の本家、注連縄を張った大きな桜の木がある、今は祖父が『隠居』している場所に。あたしの生まれた場所に。

だからだろうか、呼吸をすれば空気が体中に染み入ってくる。さらさらと葉の揺れる音が心地良い。

「では、こちらへお願いします」

昨日薊堂に顔を出した大学生くらいの男性（たしか依頼主の孫で伊瀬という名前だった）に促され、屋敷へと通される。

玄関前はささやかながらシンメトリーの庭園になっていて、春を待ち焦がれた蕾達が鮮やかに開いている。その先に大きく開かれた観音開きの扉。

同じ洋館でも、やっぱり街中にある薊堂とは規模が違うなあ。感心しながら扉を潜る、その瞬間にふわりとやわらかな風が吹く。

足許が揺れる。

――なに？

暖房かと思ったけれどそうではないらしい。それに、今の感じはなんだろう。ほんの一瞬だけ絨毯のような感触。確認した床はやはりしっかりした板張りだった。

立ち止まってしまったあたしを追い越して、常葉が屋敷へと踏み込んでいく。

「どうかした？」

「ああ……ううん、なんでも」

首を振って、その後ろを追いかける。

思わず振り向いたエントランスホールには何も奇妙な所は見当たらない。

「遠いところまで、わざわざ申し訳ないね」

客室に招かれると、白髪交じりの男性が到着を待ちかねていた。彼がこの屋敷の主人の華崎和世さんだ。祖父よりは幾分か若い位、松葉色の和服姿が良く似合っている。

まずは今回の『件』について改めて話を聞く。勿論話を窺うのは助手...正式な社員の常葉で、あたしは横に座ってじっと遣り取りを見ているだけだけれど。

「それで、見て戴きたいのはこれなのだが...」

円卓の上に広げられたのは繻子に包まれた長物。朱色の紐を解いて中から取り出されたのは、漆黒の鞘の日本刀だった。

恭しく受け取って刀身を引き出す。綺麗な波紋、曇りも刃毀れもない。少し身幅の広い、まさに家宝と言える太刀だ。

「本物ですね」

華崎さんはゆっくりと頷く。

「蔵に仕舞っていたものだが、ここ数年様子が妙で」

「先に聞いた話では確か――」

「そう。急にいなくなるんだよ」

屋敷の主人はあたし達にその『怪異』を語って聞かせた。そう、話に寄れば、この刀は時折“姿を消す”のだという。

普段は床の間に飾ってあるもので、手入れを鍛冶師に頼む以外は持ち歩くこともない。屋敷に住むのは華崎さんと先刻の伊瀬さんの他、家事手伝いが二人。常に様子を見ている者が居るわけではないにしろ、ふと気づくと無くなっているのだという。

「それが、いつも決まって満月の前後なんだ」

「見張りをつけても効果はないのですね」

華崎さんは肯定を示す。

「屋敷の者の仕業とは思えない。無くなるなら被害届けも出せるが、何故か夜が明ければ元に戻っている。それに.....」

彼は一瞬だけ言葉を躊躇させた。誰に聞かれるはずもないのに、辺りを見渡して声量を落とした。

「無くなる夜には決まって、妙な人影が現れる」

+ + +

それは十六夜の晩。毎月のように姿を消す太刀の行方を今日こそは突き止めようと、屋敷の主人である和世は自ら床の間に腰を据えていた。

とは言え夜は長く、丸さを留めた月を酒の肴に徳利を傾ける。初春の涼やかな夜だった。

普段は飾っておくところを、今宵は鞆に納めて膝に抱える。こうすれば泥棒にせよ悪戯にせよ盗むことは出来まい。

大きく開いた月窓からは月光が差し込む。それを浴びながら、またひとつ。

ふと、裏の樹が風で揺れた。天気が崩れるのかと目をやって、和世は息を呑んだ。

――月陰の遮られた茂みの奥に人がある。

使用人の誰でもないことと、時折顔を出す親族でもないことはすぐに分かった。深い影の中にいて、その姿は青白く浮き上がって見えたのである。

ごくり。自分の喉の音は耳に届いた。

目に映るのは内掛けを着た髪の高い女性。着物の裾まですらりと白く輝いている。

闇夜に映える大きな蝶の髪飾り。

人ではない、と、という思いが頭を過ぎる。でなければ闇の中、あんなに明瞭に見えるはずがない。

女がこちらを見ている。抑揚ない表情で、ただただじっとこちらを見つめていた。和世は右手にしっかりと刀を抱え直し、その視線を受け止めた。

その唇が僅かに動いた瞬間、傾けていた徳利が手からすり抜け落ちる。

あ、と思う次の瞬間には、既に彼女の姿はなくなっていた。

+ + +

「――私とその姿を見たのは、後にも先にもその夜だけだ」

華崎さんはふらりと窓の外を眺めた。つられるようにして目を遣った先は池があり、その向こうに生垣が茂っている。

「しかし、屋敷の者も幾度となく見たと口にすものでね」

もしかしたら夢かもしれないと、彼は付け加えて照れたように笑った。

確かに、月見酒で酔いが回っていたのならそう考えるのが普通かもしれない。あたしだってそ

んな月の綺麗な夜に見慣れないものを目にしたら幻想だって思うだろう。華崎さんと目が合って微笑みを返した。

けれど、常葉だけはじっと刀を見たまま。まるで何かを探しているかのように鞘や柄を見分している。

小さく頷き、やがて静かに問うた。

「確認させて戴きますが、この刀は本当に蔵にあったのですね」

「ああ――」

顔を上げたのをすぐ間近で見詰める。その目は真剣で、いつかのように強い光を見た。

手には日本刀。かちりと鞘に戻しながら、もう一度視線を落とす。

「これは代々伝えられて来たものですね」

「ああ、そう聞いているよ」

「此処の傍に祠か社はありますか」

なんだろう、酷くざわざわする。

表情の所為だろうか。普段微笑んでいることが多い彼だからこそ――うん、違う。彼の言葉のひとつひとつに込められた気配だ。淡々と事実を確認しているだけのはずなのに、何だろう、咎める色が交じっているような気がして。

「この刀は、そこに納められていたものではありませんか」

常葉が、すっと目を細める。華崎氏は一瞬だけ視線を逸らし、それから覚悟したように彼と同じくらい真摯な瞳で応えた。

「……実は、先代からはそうだったと伝え聞いている」

窓の外で木々がざわりと鳴った。

「では、ご案内します」

向かうのは家の裏にあるという社。常葉が言外から見つけた刀の真実に関わる場所だった。

華崎さんは隠そうとしていた訳ではなく、どうやら彼自身も半信半疑だったらしい。案内してくれる伊瀬さんの後ろを追いかけながらそっと常葉に尋ねる。

「ねえ、どうしてあれが社にあったものだって分かったの」

恐る恐る声をかけると、ああ、と微笑んだ。先刻の怖さは無い。その見慣れた柔和さにこっそり胸を撫で下ろす。

「刀の拵えだよ」

「拵え？」

首を傾げれば彼は深く頷く。

「あれは打刀...つまり、侍が腰に下げる大小の片方だ。脇差にしては長すぎるからそうだろう。気になるのはまず鞘や柄の部分だね」

「立派な装飾だったじゃない。少し煤けていたけど」

少しだけ見せてもらった日本刀を思い出す。長い間蔵に入っていたせいなのだろうけれど、埃や僅かな日焼けの跡があったのも事実だ。

「そう、そこなんだよ」

廊下を曲がりながら常葉は更に首を縦に振った。

「あれは代々継いできたものにしては少しくたびれ過ぎてる。多分、一度も拵えを直したことはないんじゃないかな。刀身の手入れはしてきたみたいだけど、拵えのほうは充分だったから直していない」

今の日本じゃ帯刀はしないから多少緩くても構わないしね、などと、まるで見知ったように話して聞かせる。

「でも、教科書や博物館で見る刀はどれも拵えまで奇麗だわ」

「ああいうのは保存も手入れもしっかりされているし、あまりにボロボロになったものは復元されてるよ」

そういえばいつだったか見た本物は刀身だけの展示だった。鞘まで整っているのは稀で、あまり立派なものはレプリカということか。

「つまりあの刀は打たれたときのままでこと？」

「逆だよ。手が加えられてる」

思わぬ返答に目を瞬かせる。不審そうな表情でも滲んでいたのか、常葉はあたしの顔を見て少し笑った。

それからすぐ表情を戻して、

「さっき脇差にしては長いって言ったよね。実は、あの身幅からすると太刀にしても少し半端な長さなんだ」

ああ、確かに少し幅の広い刀だなと思ったっけ。御神体は見慣れているからあまり気に留めていなかったけれど、言われれば納得がいく。刀は使い手に合わせた長さに作るという話だから、成人男性の持ち物にしては短すぎるのだろう。

「事実、鏢にも柄にも傷が一つもなかった。拵えは全て件の祖先が鑑賞用に加えたんだらう。最初からの拵えでは無いから、修復するほどの年月も経っていない」

常葉はちょっと言葉を切り、改めてあたしに向かって問いかける。

「じゃあ何のためのものなのか。実際に振るうものでなければ何か？」

ここまで揃えてくれれば、あたしだって分かる。

身幅の広い、実用性のない刀で、拵えの整っていないもの。家系に代々伝承されてきたもの。そしてこの山奥、自然に囲まれた場所。

「儀礼、もしくは奉納……だから神社ってわけね」

感心の溜め息をつく。にこりと笑った顔がやけに眩しい。

推理の一部始終を聞き終えて、もしかして本当にあたしは役立たずなんじゃないかと気鬱になった。

庭を抜けたほうが近いという話なので、玄関には向かわずに渡り廊下から裏手へ降りることになった。

履物はどうするのかと、心配する間もなく家政婦さんがあたしたちの靴を運んできた。いつの間に指示していたのだろう。

靴脱ぎ石から順番に靴を履いて外へ。伊瀬さんに続いて常葉、あたしは最後にスニーカーに足を入れる。

と、支えにしていたはずの雨戸が突然動いた。ざわりと葉の音がして――

「――翠仙ちゃん！」

大きな破裂音が鼓膜を叩いた。

風？と思った時は既に遅く。

分厚い雨戸が、大きな音を立てて閉じた。

血相を変えた常葉があたしの名前を呼んでいる。

あたしはというと、

「大丈夫……なんとも、ない……」

ぎりぎりで手を離していたから何事もなかったものの、思わぬ横風に顔を背ける。

眩暈がして足許が定まらない中で彼の腕があたしの正気を保たせた。大丈夫ですか、と焦った伊瀬さんの声もする。

「ねえ、それより――」

常葉はやや険しい顔で分厚い木の扉を見上げる。

風雨に晒された表面は塗装が剥がれかけているが、まだまだ頑丈そうだ。今くらいの風で閉じてしまうとは思えなかった。

「立て付けが悪い、ということではないようだね」

蝶番の様子を確かめながら彼が呟く。強風に閉ざされた戸はすんなりと開き、風も先から吹いていなかったように静まっている。

「何かいる？」

「かもしれない。まだ、分からないけれど」

分からない？本当に？

とっさに思い出すのは、この屋敷に来たばかりの一瞬。

一步踏み込んだときのあの妙な感じ。それに、今の扉。

まるであたしに出て行けと言っているような――

そこまで考えて、ゆるゆると打ち消す。考えすぎに決まってる。雰囲気抜群な山奥に来てちょっと過敏になっているだけに違いない。

言い聞かせて頭を振ると、あたしよりずっと不安気な瞳が見下ろしていた。

「やっぱり帰ったほうがいい。キミが怪我をしたら桂一朗さんに申し訳がたたない」

一瞬で感傷的な気分が払拭される。彼の手を振り払うように立ち上がり、スカートの裾を直しながらじろりと睨み返してやる。

「申し開きなんてしなくていい。嫌ならひとりで帰って」

「そうじゃなくてね……」

煮え切らない言葉と態度に苛々が募った。本当に、彼は引率でもしているつもりなのだろうか？

急に入ってきた女子高生風情が、慣れた仕事のペースを崩すかもしれないことは最初から分かっている。だけどあたしはか弱くなんてないし、お荷物になるほどトロいつもりもない。

あたしは見たいのだ。祖父がしていたこと、父が投げ出したもの。

あたしに辿り着けるのかどうか。あたしが、続けられるのかどうか。

それが後押ししてくれた祖父への誠意だと思っているから。

「社に連れて行ってもらえますか」

だから今度は聞こえないふりで、心配をかけた伊瀬さんに頭を下げる。
絶対に後ろで神妙な顔つきをしているだろうと予測しながら。

4. 社に待つもの

社は裏の小山の上にある。伊瀬さんの後ろを付いていくとはいえ、道は辛うじて切り開かれているばかりで獣道に近い。足元はいつ整えられたのか分からない石段で、所々風化しているために何度も足をとられそうになる。

二百メートル程上ったところで鳥居が目に入った。奥には小さいながら切妻屋根の立派な社。木々に隠れるようにして立っていたそれは、今も静かに息をしているように見えた。

「うちのより大きいわね」思わず呟くと、すぐ横から「失礼な」と返された。「え？」顔を上げるけれど常葉は知らないふり。どこかばつが悪そうに見える。

そんな遣り取りをよそに伊瀬さんが口を開く。

「元々は土地神で、ああした石洞があるだけだったようです。しかし地盤が緩んだらしく」

指し示した裏手にはまるで社の影のように洞穴があった。注連縄が巡らせてあるものの、入り口はすっかり崩れてしまって入れそうにない。

「それをあなた方の先祖が奉り直したのですね」

刀は元々洞の中に納められていたものを社に奉ったものだという。しかし数代前の主が修繕の際に魅入られてしまい、以降は屋敷の中に留め置くようになったのだと。彼の没後も返されることなく蔵の奥に仕舞われていたらしい。

「――そして再び、祖父によって発見されたのがつい十数年前です」

「何故、発見した際に還さなかったのですか」

「それが……」

伊瀬さんは少し困惑したように社に近付き、正面の観音扉を開いた。

いや、正しくは開こうとした。けれど、どうやら押しても引いても木目すらびくともしない。

「この通り、開けることが出来ません」

確かめるように常葉もまた手をかける。頑丈そうではあるが、地盤と共に歪んでしまっているのだろうと伊瀬さんが付け加える。

「さすがに壊すわけには行きませんし」

優秀な社員は暫く扉に臨んでいたが、やがて社の周囲を見て回り始めた。

あたしも彼を真似てあちこち目をやる。見た感じでは普通の小祠だ。表には賽銭箱、ぐるりと囲うように玉垣。屋根も綺麗な漆塗りで、漆黒が太陽を反射している。

と、常葉が表情を硬くする。

「ここに鐘か鏡がかかっていませんか」

賽銭箱の設けられた軒下、妻の内側を指差しながら尋ねた。確かに社によっては鈴ではなく鐘...鰐口が下げられていることがある。だとしても、鏡ってどういうことだろう？

「どうでしょうか...私も幼少から手伝いをしていますが、見たことはありませんね」

伊瀬さんは記憶を手繰るようにして首を捻った。

「祖父に尋ねれば知っているかもしれませんが。でなければ、蔵を探せばあるいは。確認しましょうか？」

「お願いします」

相変わらず彼の判断に迷いはない。

伊瀬さんが屋敷に戻った後も、あたしたちは引き続き妙なところがないか確かめることにした。

縁の下も社の背にも、当たり前のように中の様子を窺える窓も戸もない。地盤が緩んで扉が歪んだか、それともこれこそ蝶番が悪いのか。いずれにせよ開く事が出来なければ刀を納めなおすことは出来ない。

とはいえ、扉が開かないこと以外に変わった所はなさそうだ。

「どうなのかしら」

呟くと常葉が顔を上げた。あたしは独り言を切り上げて彼に尋ねる。

「この社と、刀がなくなること。関係があると思う？」

普通に考えたら不可解なことだ。なくなってしまうのは証言があるのだから確かだとして、奉納品だった事実に関係はあるのか。

それに気になるのは、誰もが見ているという白い女性の姿。

これら全てが繋がっているものなのか、判断できる基準がない。

半信半疑なあたしに対してスーツ姿の彼はさらりと頷く。

「あるよ」

感心を通り越して呆れてしまう。

本当に、この人はいつだって自信有り気だ。違うわ、経験から、知識から、自信があるのだろう。頷けるだけの根拠を聞くとまた挫けてしまいそうなのでやめておく。

「だけど、開けないことには話が進まないな」

再び扉に手をかけて揺らしている。力を入れているのかさえ疑わしいくらい、扉が突っかかる音さえしない。

それを横目で見ながら、疲労を逃がすように、ふうっと溜め息を零す。

その瞬間だった。

――。

え？

とっさに顔をあげる。常葉に呼ばれた気がして振り向いたのに、彼の様子は変わらない。

今のはなんだろうと、首を傾げる間もなく、また何か。

――、て。

聞こえた。それが社の裏側から聞こえると気付くには幾らもかからなかった。
ふわんふわんと、反響する音。木々の合間に届く音。
――まるで人の声にも聞こえる。

あたしは一人、社の裏手へと周り込んだ。風の音かもしれない、鳥の声かもしれないと言い聞かせながら。
けれど、近付けば近づくほどそれは疑わしくなっていて。

辿り着いたのは崩れかけた石洞の入り口。声のようなものは、ううん、『声』はこの中から聞こえる。
かすかに揺れていたはずの森の青色は、いまやピタリと静まっている。風が吹いていない訳ではない。それなのに驚くほど音がしない。
まるで、皆息を潜めてしまったような。
それに、なんだろう。さっきとは何かが違う。

「翠仙ちゃん？」

表から常葉が呼びかける。あたしは黙ったまま洞を見詰める。
なんだろう、何がおかしいんだろう。先刻と違うところは何もない筈なのに。潜れそうもない入り口と、張り巡らされた注連縄と……

「あれ……？」

そこでやっと気が付いた。

「注連縄がない？」

口にしてから首を振る。

違う、注連縄が見当たらないんじゃない。縄はしっかり入り口を塞ぐようにかけてあって、端が斜面にしっかりと固定されているのが見て取れる。

消えたのではなくて、注連縄ごと入り口を覆うように洞の中から滲み出しているのだ。何かがある。

真っ黒い煙のような、霧のような何か。それは少しずつ辺りに広がって、いつの間にか視界が薄暗くなっている。

夜、じゃ、ない。そんな時間ではない。

あたしは目を凝らす。そして感じ取る。

闇だ。闇。歪み。

少しずつこの森を取り込むかのように広がっていく。普通の人には見えない何かだ。それがあたしの鼻先まで近付いてきている。顔を覆いながら、触れた途端に気が付く。

重苦しく湿った、人間でないものの臭い。なんだろう。黴や苔の臭いだけじゃなくて。

「翠仙ちゃん！！」

いつの間にか常葉がすぐ後ろにやってきていた。あたしは振り向くこともせず、声に応えないまま深く息を吸う。

何をすればいいかは分かっていた。

落ち着け。落ち着いて、祖父に教わった通りにやればいいんだ。

「とふかみえみため、かんごんしんそんりこんたけん——」

見様見真似で覚えた祝詞をゆっくり唱える。心と場を静める。視界が少し回復する。ずしりと重い『それ』が空気を解放していく。

——大丈夫。行ける。

呼吸を直して、それから、言葉を刻みながら縦に四線、横に五線。

最後に、結んだ剣印で全てを払うように気を込めて。

ぶわり。

闇が拡散する。

治まると思ったそれは直前で又色濃く歪んだ。

駄目かもしれない。

一瞬だけ心を過ぎった不安。けれど。

青々した木々が揺れる。澄んだ風が湧き上がり、その歪みを掻き消した。

逃げるように収まっていく闇。そろそろと溢れていたはずのそれは、再び洞の中へと吸い込まれていく。間に合わなかったものは風に吹かれてどこか遠くへ。

たちまち闇は薄れ、やわらかな木漏れ日が戻ってきた。

——上手く行った？

肩の力を抜き、安堵と共に息を吐く。目の前には元通り、注連縄が塞ぐ石洞の入り口。凧の様な違和感も消え、さらさらと葉が擦れる音が心地良かった。

「驚いた。護法が使えるんだね」

常葉がすぐ後ろまでやってきていた。やはり彼は、あたしがしたことに対して疑問は持っていない。

「だから言ったでしょ。あたしはおじいちゃんと同じ血が流れてるって」

振り向けば安堵と困惑の交じった顔。

専門的な精進をしたわけではないけれど、幼い頃にまじないのように教えてもらった。心を落ち着かせるのにも役立つからと。しかし、まさか本当に効くとは思わなかった。

祝詞、魂を鎮めるという役割。それはつまり、魂という存在を知らなければ成立しない。

御霊、御魂。全てのものに宿るとされる生命の核だ。知能の有無は関係ない。自然のものは全てそれを抱えている。人間も、樹も。造り出したものにさえも。

ただし、あたしはそれを正しく悟っているわけではないから、理屈の上でしか知らない。

見えずとも、感じて、理を得る。

収まるべき場所にその御霊を戻す。祖父の仕事が、傍らの彼が引き継ぐ仕事が『そういうもの』なのだと改めて理解した。

とにかく、一度屋敷に戻ろう、と、常葉に促されて石洞に背を向ける。

確かにこれ以上ここに居ても何があるかも分からない。それに、常葉が気にしている鏡か鈴の有無も確かめなければならない。

社の正面へ回り込み、石段へ。あんなことがあった後なのに驚くくらい山や社に変化はなかった。自然の正常な姿だ。

それにしても、とあたしは歩を緩めた。

先刻の声は何を言っていたのだろう。

誰かが言っていた言葉だとして、何を伝えたかったのだろう。

それは、あたしに対して？それともやはり刀について？もやもやが残ったまま華崎邸への坂道を下るのは少し気後れがする。

通りかかった社の扉に手をかけた。初めて祝詞を唱えた所為で心も落ち着かないし、何か手掛かりが欲しかったのだ。自分の身に何が起きてきたかを忘れていたわけではない。寧ろ、だからこそ不用意だったと言える。

本当に開かないのかと、手を伸ばした瞬間に。

瞬きを終えるか否かの瞬間に。

触れた木の感触。それが一瞬で無くなる。

視界の端が歪むのが分かった。

気が付いても、今回ばかりは遅い。

扉が歪む。

闇が、膨らむ。

「翠――」

焦った様な常葉の声が掻き消える。

その代わりに耳に残ったのは、先刻の。

“かえして”

ああ、返して欲しかったのか。

飲み込まれたと理解した途端に、その言葉も明確になった。

5. 闇と蒼色

暗い。

夜よりも暗く昏い場所に放り出されたのだと分かった。

だってここは、何もない。音も聞こえない、空気の流れも、起きているのか眠っているのか。それよりも、あたしはここに居るのだろうか？自分の心臓の音さえ見つけられない『無』の中で、あたしがひとつ浮かんでいる。

何かないか、手を伸ばして足を踏んばって、声を上げて求める。

しかし掴めるのは空、踏み締めるのは無、発せられるものはただただ虚。恐ろしいという感情さえ見つからない。

だめか。諦めて手を下ろす。我ながらこの落ち着き様は感心する。人というのは得体の知れないものに怯えると思っていたのだけれど。それとも、この凪いだ心さえ無の成せるもの？

『かえして』。

何を？

最後に聞こえた声が今も頭の中に響いている。心の中で呟いてから、祖父に教わった九字を切ってみる。気配さえ掻き混ぜられなくて静に戻る。ため息をついたけれど、吐息になったかどうか。

唯一判るのは、このままだとあたしも無になるということ。

どうにかしたくてもならないものがあると知るのは悟りに近く、そして悔しかった。

次第に時間の概念も消える。鼓動さえ聞こえない中では、一秒の長ささえ定かではない。

ここに揺れ始めてどれくらい経つのか。一分か、十分か、はたまた十年なのか。これではまるで夢の中のようだ。蝶が見る人間の夢。人間の見る蝶の夢。

薄れていくのだ。境界が。

そしていつしか、あたしも消える。

――薊堂、これで本当になくなっちゃうな。

一番に思いついたのが、よりもよってあの場所のことだった。

祖父のようになりたくて、父親から離れたくて始めたアルバイト。

受け持つのがどんな仕事だとしても、例えば、今回のような得体の知れないものと対峙する仕事だとしても、此処から出て行こうという気持ちはさっぱり浮かんでこない。

まだ居付いてたった五日だけど、まるで長いこと住んでいる家のように落ち着ける場所だった。
あれがなくなるのは嫌だなあ。それとも、あたしがいなくなってもあの人が続けてくれるだろうか。

あの人が、唯一残った社員が。常葉が。
子供をあやすような微笑み。口にしなくても抱えている誇り。
きっと自信と矜持を持つ、あの人。

トキワ。
そう言葉にした途端、異変が起きた。

ふわ。

僅かに起こる風。ほんの少し薄れた無限の闇。

「トキワ……？」

ふわり。

今度は確実に声になった。見下ろせば闇に慣れた様にして自分の掌が見える。
さっきまで、あんなに昏かったのに。
振り向くと宙に小さな裂け目が生まれていた。裂け目だと分かったのは、その向こうで何かが揺れている所為だ。

ゆらゆらと、目に焼きつく色。
光だ。ヒビの隙間から青い光が射している。冴えた色なのに、とてもあたたかい。

それがどうして生まれたものなのか分からない。けれど、引き金になったのだと咄嗟に思った。
言葉なのか、それとも、脳裏に過ぎった彼の微笑みか。
あたしは分からないまま、もう一度だけその名を呼んだ。

「常葉」

亀裂が広がる。青い火が大きく燃え上がって、闇を飲み込んでいく。
崩れる、ガラガラと音を立てて。
光を閉じ込めていた水晶が割れるように。

青い炎。
青い闇だ。

その輝きの中から、誰かの声があたしを呼ぶ。

「翠仙ちゃん」

目を開けると軒先で横になっていた。見上げた視界の端には常葉の顔。その背中越しに見える、オレンジに色付いた中庭。ふっと和らいだ瞳に、自分がどうやら気を失っていたらしいということに察する。

「良かった、気がついたね」

額の上に乗っていた冷たいタオルを除けて、身体を起こす。眩暈も頭痛もなさそう。どうやら華崎邸まで運ばれてきたらしい。何があったのかが酷くぼんやりしている。

『もしかして、あなたが助けてくれたの?』どうしたのか、とっさにそう尋ねそうになっている自分に驚く。

そうだ、吹き出した黒い霧のようなものに包まれて……

「あたし……」

「石段から落ちたんだよ」

あまりに明瞭な声に思考が停止する。目を遣れば真剣な常葉の表情。

「石段を降りていて、崩れに足を取られたんだ。僕が腕を引いたから下までの転落は免れたけれど、転倒のショックで気を失ってしまったみたいで」

そんな筈はない、思うのに言い返すことが出来ない。状況説明というより、まるで言い聞かせているような丁重さ。まさか、あれが夢だった?この人の目にはそう映っていたのだろうか。だけど、社から石段へ行くまでの過程が思い出せない。

思い出せるのは――

闇。

それに、あの青色。

あたしの言葉に反応して、闇を切裂いた炎。

あの色を、多分あたしは知っている。

暫くして背筋に冷たいものが落ちてくる。

目が覚めて分かる。あれは、命の終わりだった。もう少し遅ければ確実に無になっていた。それに気が付いて、カタカタと歯が鳴る。

夢だとは思えない、あの感覚。刻限を目の当たりにした自覚と、握りしめていた手の爪痕。蝕んでくる底知れぬ恐怖。

それを阻んでくれたのは、傍らに居た助手の掌だった。

「もう大丈夫だよ」

ふわ、と頭に置かれた手から伝わる穏やかさ。それこそ子どもとしてあやされている感じがしたけれど、なんだか安心してしまっていて逃げることができなかった。

今は、このままでいいかもしれない。彼とあたしの考えているものが食い違っているけど、このやさしさだけは本物だ。

『ありがとう』。

口にしようとしたところで、庇を越えて伊瀬さんが顔を出した。

「常葉さん」

額にあてがわれていた掌が遠ざかる。彼の視界からも外れて、あたしはふっと息をついた。

「どうでしたか」

「やはり、ありませんでした。昼間に消えるのはこれが初めてです」

その遣り取りに、彼らが何を話しているのか、その意味を瞬時に読み取った。

なくなった？

もしかして。常葉はゆっくりと頷いた。瞳が琥珀色に輝く。

「刀が無くなった。ちょうど翠仙ちゃんが足を滑らせた頃にね」

伊瀬さんの不安気な表情が更に色濃くなる。当たり前だ、『こんなこと』が起こらなくなるように依頼したのに、まさかその合間に刀が消えてしまうなんて。

慌てて立ち上がろうとしてたたらを踏む。さすがに起き抜けの頭には厳しい。それを視線で窺められて。

「大丈夫です。行き先は分かっています」

言葉には、やけに確信めいたものがあつた。目を瞬いたのは何も伊瀬さんだけじゃない。自信たっぷりに――いや、それを事実と知っているかのように、常葉は言うのだ。心配はない、と

不思議な事に、今回ばかりはなんとなくあたしも予想が出来た。どうしてだろう？彼の仕事振りに感化されでもしたのだろうか。

あたしはちらりと裏山に目を向ける。その上にあるはずの鳥居を探して。

刀は、きっとあそこにいる。

「しかし、それを確かめるには少し条件が足りません。今日は一度引き上げさせていただいて、明日また日中窺います。宜しいですか」

「そうですね。では、鏡は明日までに探しておきます」

知らずにぼんやりしていたところに、彼らの会話が耳に入って我に返る。

「帰るの？」

「日も落ちてきたし、一旦仕切り直した。きみも少し休むべきだね」

あたしは大丈夫、と胸を張ったものの、足元はふらふらと覚束無い。これじゃ全く様になっていない。

おまけに、さっきから、妙に眠くて。

座っていると飲み込まれそうだから立ち上がりたかったのに、本当にどうしようもないわ。

それを振り払おうと懸命に頭を振る。欠伸を噛み殺せば、常葉が目元を綻ばせる。

「色々あって疲れただろう。無理はしないほうがいい。それにどうせ、このまま残っても社は開かないよ」

その日は結局黄昏に見送られて、薊堂に引き返すことになった。

我が家兼バイト先に戻ってきても、あたしの眠気は居なくなってくれなかった。

寧ろ華崎邸を後にした時から増して思考が鈍くなっているのが分かる。常葉の事務仕事が終わるまでは執務室に残ろうと頑張っていたのだけれど、どうもそれが仇になっただけらしい。

すっかり日の落ちた窓の外。

ソファに座っていたはずが、その心地良さに頭を預けて。

いつしか目蓋を開けているのさえ億劫だった。

「僕は帰るからね。戸締まりはしていくから、ちゃんと部屋に戻って休むんだよ」

「うん……おやすみ……」

仕事を終えたのか、席を立つ常葉の気配。けれど、それを確認することが出来ない。

結局彼に届いたのかも分からないくらいの相槌を打って、パタリ、扉の閉まる音を遠くに聞いた。

ふわふわ。

ふわふわ。

まるでソファに溶けて行くような心地。

彼が帰ってからどれくらい経ったか分からないけれど、どうやって起きればいいのか分からなかった。

ふわふわ。

ふわり。

あたたかい。

気づけば放り出していた体躯に毛布がかかっている。それに何の疑問も持たないまま夢の淵を彷徨う。

ふわり。

額に乗せられた掌。

だれ？

僅かな違和感も声にはならない。

精一杯持ち上げた目蓋の隙間から外を見れば、出て行ったはずの『彼』が戻ってきていた。

でも、顔すらあげられない。目をあけているのがやっと。

その目蓋さえも、掌が再び重力を強めさせる。

「――害はないと判断したから、散らすだけで済ませてあげたのにね」

薄暗闇に声が届く。それは彼の声に違いはないけれど、何を言っているかを判断できる思考が残っていない。

言葉はただの記号として、まるで異国の言語のように音だけが耳と脳をすり抜けていく。

「それなのに君に危害を加えようとするなんて。僕も随分軽んじられたものだ」

「ときわ……？」

やっとの思いで名前を呼ぶ。

ふっと微笑む気配。あたたかい声と掌。

いつもと変わらないはずの。

「大丈夫。明日には終わらせるから。だから安心しておやすみ」

その声がついに夢の入り口へとあたしを押しやる。

奥へ奥へ。やわらかいノイズの先へ。

背中を押しした掌が遠ざかっていくのか、それともあたしの意識が飛んでいくのか。

それももう分からないけれど、夢が、すぐそこにある。

夢へ。

夢の奥底へと。

+ + +

晴れ渡った空に真っ白な月と、草原。

若いススキに覆われた大地の上にあたしは立っている。

振り向けば背後には小さな祠。頬に当たる風。

そして空を翔る青色の炎。

あの色をあたしは幼い頃から知っている。幼い頃に一度だけ、あれに近付いたことがあった。うん。触れたことがあった。その影を見つめながら息を飲む。

どうして忘れていたんだろう。あれは、 だ。

あたしを助けてくれた色。助けられたのは、きっと二度目。

そうでしょう？おじいちゃん。

今度会ったらお礼を言わなきゃ。そう思うけれど、きっと、目が覚めれば覚えていられない。

だからいつか、思い出す瞬間が来たら。あのひとに。

『ねえ。あなたは、あのときの』。

青色の炎。灰色の空。

その中にふと真っ白な獣が現れて、あたしはそれをただ黙って見上げていた。

+ + +

6. 払暁

目を開ければ、閉め忘れのカーテンを越えて朝陽。

どうやって部屋に戻ってきたのか憶えていないのに、しっかり自分のベッドに収まっているのには感心する。時計は少し早くて六時、春を祝う鶯の声が庭先から聞こえる。

なんだか、不思議な夢を見た気がする。

夢だから思い出す前に消えてしまうけれど。

軽く頭を振って気持ちを切り替える。出立は八時過ぎ。華崎邸までは電車で二時間余りだから、向こうにはなんとか正午前には着く計算になる。依頼先のこととも考えてもう少し早い方がいいのではないかと進言してみたものの、社員の返答は『問題ないよ』だった。『半日もあれば充分だから』と。

本当に、彼に任せれば全て問題無いような気がしない。もうあれくらいで困惑したりもしないけど。

刀と、社。それと鏡。

私にはぽつぽつとした途切れた線でも、きっと彼にはもう輪郭が露わに見えているのだろうか。

社といえば、薊堂にも一つあるのよね。

一階の裏手、履き出し窓から庭に出る。細長い敷地の端に鎮座する、ブロック塀と背の低い緑葉樹に護られた小さな祠。あたしの背丈ほどしかないその前で手を合わせる。

ここに来てからというもの、毎朝なんとなくお参りを続けていた。自分が取り立てて信仰深いとは思っていないけれど、こうして手を合わせる習慣はやはり浅見家の――祖父から引き継いだ血筋に帰依するのだろう。本家を引き継ぐつもりは、今の所ないけれど。

正面の観音扉を引き開ける。置物からしてどうやら豊穡の神様らしい。もしかしたら本家で奉っているものと同じものかもしれない。今度祖父に聞いてみようか。

「たまにはいなり寿司でもお供えしようかな」

昨日備えた桜餅を眺めながらそう呟く。

「それはいいね」

「わっ!？」

独り言のつもりだったのに、すぐ後ろから声。勿論声の主は誰だろう彼だ。表情は悪びれもせず涼やかなもの。

「おはよう、翠仙ちゃん」

「おはよう……おはようって、常葉、あんたね」

もう少し他人を驚かさないう配慮をしてもいいんじゃないだろうか。あたしは必死になって心臓をたしなめながら彼を見上げる。その表情にふと夢の欠片をみつけて、とっさに手繰り寄せた。

「ねえ。昨日、夜に戻ってきた？」

振り返るのは、昨晚の言葉。

あれは夢？それとも現実？ソファでまどろんでいた筈の自分が部屋にいるものだから、どこからどこまでが本当だったのか判断が出来ない。

あの時の彼は何か違った。口調も気配もいつもと変わらなかったはずなのに。

彼を見た途端に膨れ上がる疑問。交差する視線は、要領を得ないままパチパチと瞬く。手繰り寄せたものは間違いだったと気が付く。

「いや、真っ直ぐ家に帰ったけど」

その表情に口に出来ない程度の不調和を憶えた。けれど、この際どうでもいい。あたしが知りたかったのは、あのぼんやりした一瞬が本当なのかどうかということだ。

彼は言ったのだ。『明日には終わらせるから』と。

明日には終わらせたい、じゃない、希望観測ではなくて、まるで。

彼自身が、自らの手で完結させると宣言したような。

それは今まで感じた『自信』とは種類が違った。あたしが彼に感じる矜持とは全く異なる、絶対的な結論だ。

じわじわと広がる、なにか。

この場所に――彼に対する違和感。

その答えは、あの社の中にあるだろうか。

華崎邸に辿り着けば、昨日と同じように伊瀬さんが出迎えてくれた。華崎さん本人はどうやら仕事で忙しくしているらしく、報告もそこそこにそのまま蔵に通された。

目的は勿論、常葉が拘っている鏡——そう、一夜明けて『鏡』だと彼が断言したのだった。

「確かに存在していたようですね」

蔵中を纏めた書面には間違いなく鏡の所在が記されていた。けれど、肝心のそれが何処に紛れてしまったのか、影はあれども姿は見えぬ。立ち尽くしても仕方がないので、あたしたちは一角を手分けして探すことになった。

「あるとしたら、この辺りなのですが」

とは言っても、普段締め切られている蔵の中ははじめじめと薄暗い。小さな電球と開け放たれた明かり窓からの陽光。その中に落ちる埃の影。搜索はどうも難航しそうだ。

桐箱や葛籠を開けて、それらしき包みを開いても、出てくるのは瀬戸物や和綴じの本ばかり。堪らずにへたりと床に腰を下ろす。制服の紺色に埃が付くだろうけれど気には留めない。

「ないわねえ」

遙か頭上の梁を見上げて洩らす。随分古くて立派な建物だ。一体いつ作られたものなのだろう。

視界の端に常葉が映った。彼は何かを熱心に眺めているようだったけれど、やがてそれを持ってこちらに歩いてくる。

「でも、面白いものを見つけたよ」

差し出されたのはやはり和綴じ本。葡萄茶の表紙には墨字で何やら書かれているものの、随分色褪せているし、だいいち草書で読めない。覗き込んだ頁には挿絵と共に仮名文字の羅列。唯一読み取れたのは刀と鏡の文字。なんて書かれているの、尋ねると親切に教えてくれる。

「やっぱりあの石洞の御神体は二つだったみたいだね。それだけじゃない。ここには『二体を放すべからず』と記されてる。『隔たる時、禍を招く』。どのような災いがあるかは書かれていないけど」

「産土神だから、飢饉や日照りの類かしら」

だろうね、と頷く常葉。

刀と鏡、その二つを放してはならない。二つはどうやら何百年も前に同時期に納められたもので、以来あの石洞の御神体として奉られるようになったらしい。石洞が潰れた後は、表の社へ。それを放してしまったとき、災害が起こる。

災害が先立ったのか、それとも偶然に重なってしまったのか。真実を知る手掛かりは今になっては存在しない。それでも古くからこの土地の人たちは彼らを崇め、災厄を鎮めることで平穏を保ってきたのだろう。

それが途絶えた今、離れ離れになった二体が何を思うのか。

「この二つは長い間離されていたのよね。それなのに何も起こらないのは、災いが迷信ってこと

かしら」

少なくとも刀が華崎邸に飾られていた間は、鏡と別々に離れていたことになる。なのに日照りどころか地震すら心当たりは無い。災害といえる災害はなく、代わりに刀が消えたり真っ白な女性の姿が見られるようになったり。華崎さんから聞いているのはそれくらいだ。

おそらく常葉もそれには気づいていたのだろう。僅かに眉根を寄せて、
「それは恐らく、力が薄れている所為だよ」
その哀しげな瞳に思わず息を詰まらせる。

ちから。それはつまり、生きるものの、生きるための力だ。

古来より、日本に住まう人々は万物に魂が宿ると考えてきた。草にも木にも、自らの手で作り出したものにさえ。つまりそれは、刀や鏡にも当てはまること。

そして、人間にも寿命があるように、生きるものには刻限がある。時間が進めば若いものも老いて、灯火は弱まっていく。

弱くなった魂はどうなってしまうか。この表紙の文字のように煤けて薄れてしまったら、読み取れないくらいに見えなくなってしまったら。

或いは既に……

『返して』。

ふと、華崎さんが見たという女性に想いを馳せる。

純白の凜とした佇まい。大きな蝶の髪飾り。見たこともないはずのその姿がありありと浮かび、哀しげな顔に声が重なる。

きっと彼女は刀だ。刀の魂が形作られたもの。刀は探していたに違いない。片割れを。鏡を。何故か、強くそう感じた。

天井にはシャンデリア、ビロードのカーテン。足元の絨毯は何処製なのか。薊堂よりは数倍お金がかかっているんだろう。もしかしたらこの白磁のカップも高級なのかもしれないけれど、それを考え始めたら紅茶の味がしなくなるのでやめておく。

「見つかるといいわね、鏡」

休憩がてら紅茶をいただきながら、ふっと言葉を零した。勧められた昼食を丁重にお断りして、せめてもと用意されたものだった。

右隣に席をとった常葉が、ちらりと首を傾げる。

「見つかるさ」

相変わらず不安のひとかけらもない言い様だ。二日にもなればすっかり慣れてしまって、溜め

息を吐く気にもなれない。

「――返して、って言ってたのよ」

紅茶の穏やかさと共に、ふうっと息を吐きながら呟く。頬の辺りに常葉の視線を感じる。

「でも、今考えたら、助けてって意味だったのかもしれない」

返して。

見つけ出して。

力の弱まってしまった魂。重い身体を引き摺って、満月の夜に彷徨う女性の姿が脳裏に過ぎる。地に面した場所から薄れて、闇に溶け出す彼女の姿。それがいつの間にか、あの闇の中に紛れた自分の姿と重なる。

掻き消えて、無に還る目前。逃れられないと知りながら、叫ぶしかない。

あたしには出口があった。けれどきっと、彼女達にはそれがない。

助ける術はあるの？助けてあげたい。せめて、二つを近づけて上げられれば。そんな思いがいつしか深くなっていた。

カップを覗き込めば、憂いの滲んだ自分の顔がうっすらと映っていた。それに思わず苦笑する。

少なくとも一週間前までは、こんな感覚は持ち合わせていなかった。

目に見えないものを確かなものと認識し、間接的に掻き集めた誰かの願いの成就を祈る。果てしない、儂い願いだとしても。

本当は、もっと早くから学ばなければならないことだったのかもしれない。いつしか尊敬するようになった祖父の背中を追うならば。父親には伝えられることの無かった意識、父親の拒んだ道だ。

この仕事を続ければ、この感覚はもっと深いものになるだろうか。

もっと確かなものに、そして、それを叶えるための力を持つことは出来るだろうか。

――常葉に聞いてしまえば早いんだけど。

見込みがあっても無くても、それを断言されるのが怖いから、今は黙っておく。

だから、あたしは言い直す。

「見つけましょう。鏡を」

声は聞こえなかった。けれど、助手の頷く気配が視界の端に映った。

慌てて顔を上げる。知らないうちに時計が2時を差していた。

不味い、また転寝してしまった。眠いのは春のせい、なれない環境のせい。それよりは、慣れないバイトのせい？意識が無かったのはおそらくたった数分のことだけれど、紅茶で一息ついていた客間には既にあたし一人。

「常葉……？」

一体どこに、と疑問を浮かべる前に、テーブルの上に残されたメモに気が付いた。

“2時半から鏡探し再開”

カップやお茶請けがなくなっているのを見ると、片付けに席を立ったのだろう。もしかしたら皿洗いでも手伝っているのかもしれない。少し時間に余裕があるのは、あたしが眠っているのに気づいて気遣ってくれたのかも。柱時計の振り子の音が心音のように室内に響いている。

あたしは暫くぼんやりとしていたけれど、軽く頭を振って、思い立って立ち上がる。

待っているより、少しでも早く探し始めた方が効率がいい筈だ。伊瀬さんに頼んで蔵を開けて貰おう。

決断すれば行動の早い性質なので、ボールペンを取り出してメモにぐりぐり手を加えると、助手の帰りを待たずに客間を後にした。

“2時■から鏡探し再開！！”

別に、読んでもらわなくてもいいんだけど。

敷地内の西の端。努めて洋色の強い華崎邸の、前身の面影を残す白い土壁の建物。

屋敷自体は明治に入ってから建て直したもので、元は離れや庵のある武家屋敷だったらしい。おそらく、この蔵だけが彼らと同じ時代を生きた存在なのだろう。

「手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫です」

錠前を外してくれた伊瀬さんの言葉に遠慮を示して蔵の中へ。埃は随分飛んだようで、昼前より幾分か呼吸がし易い。

それに、先刻より大分片付いている。休憩している間も伊瀬さんやお手伝いさんが探してくれたのかもしれない。あたしは制服の腕をたくし上げて、まだ手のついていない葛籠を開いた。

書置きを残したものの、常葉を待っているつもりはなかった。見た目や大きさはさっきの書物

から把握しているから、一人でだって探すことはできるはずだ。

鏡はいわゆる白銅円鏡。大きさは掌の上に乗る程度で、背面には花と獣の姿。素のままに納められているはずはないので、更に布や袋の中を開けることになる。

息を潜める空間の中で、あたしだけがばたばたと騒がしい。例えばこの蔵中の物に魂が宿っているとしたら、どんなに怪訝に思われていることか。

埃を吸ってしまい、むせ返る。邪魔になる後ろ髪を束ねて、また別の棚を開けてみる。

「この中にもない、か」

ふっと息を吐いて、また次の箆筒を開いてみる。

一時間程経った頃、はかどらない搜索を見兼ねてか伊瀬さんが顔を出してくれた。挫けてきた心もあり、有り難く手を借りる。

「伊瀬さんも、真っ白な女性の姿を見たんですか？」

引き出しの中身を丁寧に改めながら、会話の糸口として尋ねてみる。正面の桐箱の収納物を床に広げながら伊瀬さんが首を傾げた。

「ええ。でも」

言って、物思いに耽るように言葉を濁す。目が合うと、伊瀬さんは困った風に微笑する。

「実は、僕が彼女を見るのは今回に始まったことじゃないんですよ」

あたしは思わず手を止める。すると彼は益々困惑したように、まるで、昨夜の夢を手探りで説明するように眉尻を下げた。

「小学校に上がった頃、だったかな。当時はまだ此処は祖々父の持ち物で、遊びに来るのも年に一度か二度だけでした。――そう。彼女に逢ったのは、確かお盆の事だった」

伊瀬さんはその時の出来事を詳しく教えてくれた。好奇心でひとりで忍び込んだこの蔵。遠くには蝉の音が響いて、静かで神妙な気配を漂わせるこの場所が、まるで別世界のように感じたこと。

そして彼は逢った。蔵の最奥に、先刻まで鍵の掛かっていたこの場所に、見知らぬ女性が佇んで居た。

裾の長い、銀色の打ち掛けを羽織る女性。髪に揺れる大きな髪飾り。

肌から着物の裾までが透ける様に白く、美しかったこと。

そして一目見ただけで、人間ではないと感じたこと。

「何故かその時は少しも怖いとは思わなくて。それに、なんだか哀しそうで。思わず声をかけたんですよ、変な話ですけど」

「声を？」

伊瀬さんは頷いてみせる。

「ええ。思わず、『大丈夫？』と。すると相手は『必ず逢えるから』と。……今思えば、彼女は

あの頃から探していたんですね」

その表情は、懐かしげに哀しい安堵。

黙々と蔵の中を改める作業は続く。

随分と探した気がするけれど、見渡してみれば手をつけたのはほんの一角。これではいつまでかかるか分からないと、不安を憶えるものの手を止めることはない。

あたしはまた次の箆笥に移動する。背丈の低い造りだけれど、引き出しは大小合わせて五つ。その最下を引き出せばブリキ缶や着物柄の巾着が収められている。

古風ながらも華やかな、まるで宝箱のようなその中に、朱色の風呂敷包みを見つけて引っ張り出す。紋様は金刺繍の舞蝶。大ききの割りにずしりと重い手応えに期待したものの、開いてみれば丸いお菓子の缶の中に文鎮と千代紙の束。その他にも鋏に和紙や綺麗な柄の端切れが出てくる。

「髪飾りと同じだと思ったのに」

うーん、唸ると、すぐ脇で葛籠を開けていた伊瀬さんが手元を覗き込み感心する。

「祖母のものかもしれません。ああ。この柄なんて似ていると思いませんか」

彼が指差したのは隣の風呂敷だった。鮮やかな緋の牡丹の柄。あたしは良く分からずに首を傾げる。

「何とですか？」

「何って、女の人髪飾りでしょう？」

益々首を傾げる。髪飾りは確か蝶のはずだ。真っ白な揚羽蝶。華崎さんからもお手伝いさんからもそう聞いている。

そこまで考えて、ふわふわしていた背筋に一本線が通った。

純白の女性。

屋敷の外で憂う女性。

蔵の中に佇む女性。

誰かを探し、誰かを待つ。

蝶と牡丹。

刀と、

透ける様に、白い。

「あの……幼い頃に逢った女性の簪は、どんな形だったか覚えてます？」

「あれは確か、」

彼の言葉を、固唾を呑んで待ちわびる。

「真っ白な牡丹の花でしたよ」

思わず涙が出そうになる。

もしかして。

伊瀬さんが蔵で会ったというのは。

『必ず逢えるから』。

ふわり。

吹くはずのない風を首筋に感じた。

誰か呼ぶ気配がする。私じゃない。私をではなく、誰かを、誰かが。

誰から誰への声なのか、分かっていた。空気を震わせない呼び声。名前。

『
』。

見覚えのない女性の横顔が、夢げに微笑む姿が脳裏に浮かんだ。右のこめかみには大きな白銀の牡丹。引き寄せる内掛の袂。

振り向くと、狭窓から入った光が一筋、蔵の中を射している。暗さに慣れた視界に眩しく、スポットライトのように。きらきらと揺れる塵。僅かに朱色の交じった陽光。陰影。

それがひとつの筆筒を照らし出す。

もしかして。

あたしはその桐の筆筒を引き開けた。迷わずに一番上を。

その敷板に隠れるように、煤けた絹の包み。震える手で抱き起こして、結び目を解いた。

中から顔を出したのは、華獣文様の白銅鏡。

「あった……！」

思わず宙高く掲げ、そして声を上げた。伊瀬さんと二人、顔を見合わせて歓ぶ。

鏡は間違いなくここにあった。

長い間、光を浴びることも出来ないまま、眠っていた。

その背には、大輪の牡丹の華。

手に収まる鏡。刀と対を成す御神体。それがやっと手の上で陽の光を浴びている。

時間を経ているとは思えない程に美しい色彩だった。羽の生えた獣と、ふわりと開く牡丹の花。あたしはそれを、壊してしまわないように大切に抱えた。勿論、白銅製の鏡がそんなに脆くないことは分かっていたけれど。消えてしまわぬよう、逃がしてしまわぬように、丁寧に両手で捉まえる。

『返して』。

『必ず逢えるから』。

今逢わせてあげるから、待っていて。

顔を上げれば、もう一度伊瀬さんの安堵した表情と視線が合った。彼は頷く。

「これで社が開きますね」

「はい。じゃあ私は、常葉と――」

社へ、と、応えようとして、あたしは言葉を見失った。

そうして、とっさに振り返る。

そういえば、あれからどれくらい経ったのだろう。ポケットの携帯電話を確認する。デジタル表記は簡単に四時を越えている。けれど、常葉は？

常葉は、何処に行ったの。

見渡した蔵の中にあたしの助手が居るはずはなく、開いたままの入り口にだって、影はない。意気込みすぎてすっかり抜け落ちていた。約束は二時半のはずだ。彼の書置きにはそうあった。遅れるとしても、こんなに時間が開くはずがない。真面目な彼のことだから、忘れていたわけもないだろう。

それなのに、どうして。

裏の檜の木が、ざわざわと音を立てた。

落ち着かないままに、伊瀬さんと共に蔵の外へ出る。とにかく、鏡が見つかったことを報告しないと。でも、何処にいるんだろう。依頼主の屋敷の中に心当たりは先刻の客間くらいだけれど。

それでなければ。

「おや、まだ探していたのかい」

声をかけられて立ち止まる。いつの間に帰ってきていたのか、玄関で華崎さんに会った。深く会釈をすると、ふわりと微笑む。それからあたしの抱えているものに目を留めて、細める。

「見つかったんだね」

「はい。あの、予定通りに社へ納め直しても良いですか」

緊張しながらも、助手の代わりに家主への報告をする。あたしみたいな子供に言われて、変な顔をされないだろうかと過ぎるけれども、華崎さんの表情は変わらず穏やかだった。

「勿論。宜しく頼みます」

元々は奉納品なのだし、それで二つが幸せになるのなら、と。華崎さんが頷いた。

刀と鏡、蝶と牡丹。

きっと、この先に待つのは一瞬の邂逅と永遠の乖離だけれど。それでも、寄り添うことが出来るのなら幸せのはずだ。

人でも、物であっても。

「それで……うちの常葉を見ませんでしたか」

「常葉さん？」

華崎さんは怪訝そうに瞬きをすると、やがて心得たように頷いた。ゆるりと右腕を持ち上げ、屋敷の裏手を指し示した。

「ああ、彼なら随分前に社へ向かったようだよ」

――やっぱり！

思うのと同時に、あたしは山道へ向かい走り出した。

空が、暗い。それは夕暮れの近さでも広がり始めた雲のせいでもなかった。

山道を登る。崩れの目立つ石段、参道の両脇に並ぶ木々。その中に紛れる、桜の蕾。黄昏が迫るはずの山の情景は色彩が強まっていた。焼き直した写真のように、乾く前の油彩画のように、青は蒼へ、緑は碧へ。蕾の目立つ桜はいつしか開き、時間を早めたみたいに花卉が揃っていく。

それでもあたしは、足を止めない。ピリピリと、空気が鳴っている。肌が粟立つ感覚。怯えなのか動揺なのかも定かではないけれど、神経が感じ取っているものが真実だと悟る。

やがて、その果てに深紅に染まった鳥居が見える。

坂道を登りきると瞬きとの瞬間は同じだったかもしれない。鳥居の下、石段の最上に足を下ろしたその刹那、辺りが一瞬で闇に包まれる。

違う、飛び込んでしまったのだ。あの石洞から滲み出ていた闇が、いまこの場所を飲み込んでいる。それなのに、あの時とは違う。その証拠に彼の後姿が見える。あたしはあたしそのまま、自分の身体すら見失うことなく闇の中に立っている。

ふと、視界を何かがかすめた。

ふわりと横切るそれは薄紅の花弁。闇の中を照らすように、桜の花びらが降りしきっている。非現実的で幻想的な、春の宵。

目を凝らす。社が在ったはずの場所に真白い女性が浮かんでいた。左のこめかみに蝶の髪飾り。それが華崎さんの言っていた女性だと分かった。

奇麗だ。奇麗な、刀。

それを認識した瞬間に、闇が伸縮を始める。

闇を覆う蒼い光。洪水のような炎。そして昼間が戻ってくる。

まるで幻かと思えるほどの一瞬。女性は最後に微笑んだように見えた。

解決したのだと気づいた。

違う、解決させたのだ。彼が。

色彩の収まった山の上に、あるのは社と彼の背中、そしてあたしの存在。向かい合った社の扉は何事もなかったかのように開いている。

「……常葉。あんた」

「ああ、翠仙ちゃん。来てたんだね」

常葉がゆっくりと振り返る。どうせあたしが居ることなんて知っていたくせに。唐突にそんなふうに解った。

「見つかったんだね、鏡」

「でも、本当はもう必要ないんでしょう」

目の前の状況を見れば分かる。開け放たれた扉、その奥に横たわっている刀。やはり、と思う。彼女は――刀は、社の中に戻っていた。

鏡を探そうと言ったのは常葉のはずだ。御神体が二体だったことを見抜き、その二つを離すべきではないと理解した。そして実際に、彼の言う通りのことが事実として存在した。

だから、社を開くには、刀の消失を防ぐには鏡が不可欠なのだと思ったのに。

「欲しいよ」

彼は目を細める。それから手を伸ばして、こちらに催促する。

「此処に納めるべき御神体は、一対でなければいけない。華と蝶、鏡と刀。突き詰めれば迦陵頻伽と胡蝶だね」

「どうして……わかるの」

ずっと聞きたかったことだ。確認したかったこと。最初は、彼が優秀だから見通せることなんだと思ってた。けどおかしい。

ううん。本当は、それにさえ気づいていたんだ。

ロクに文献も探さず、見回すだけで言い当ててしまう。見えるものだけでなく、それなのに、まるで今目の前にあるかのように断言していく。

彼には見えているんだ。あたしには見えないもの。生半可な人間には、簡単には分かり得ないもの。

そして――闇を打ち消した蒼い炎。

「常葉。あなた、」

それから間違っただけじゃない気がして、言葉を正す。

「貴方、人間じゃないわね」

7. 常緑の葉

一瞬の、ほんの一瞬の静寂。それでも彼の気配に変化はない。

相変わらず何を考えているか分からない穏やかな瞳。その微笑が、今はやけに鋭く見える。

「どうして、そう思うのかな」

返答の代わりに常葉は薄く笑う。まるで冗談に付き合ってくれているような顔が無性に気に食わなかった。

けれど、あたしに引き下がる気持ちは無い。

「誤魔化したってダメよ。お父さんを騙せても、あたしには通用しない」

突きつけても彼の柔らかい目元さえ変わらない。けれど、動揺さえないということは、彼自身も予期していたこと。あるいは、待ち構えていたこと。

あたしは深く深く、息を吸う。

怖くはなかった。後ろめたさもない。だって、変でしょう。家主さえ知らないことを口にした、祝詞の力が及ばなかったその絶妙なタイミングで風が吹いたり。石段から落ちかけたあたしを――ううん。闇の中に紛れた私を助け出してくれたことだって。

そうだ。あたしが拙い護法を唱えたときに助けてくれたのも、深い闇に容易く亀裂を入れたのも、全部彼の力だ。あの蒼い炎は知っている。あの風の匂いも。

だいたい、最初からなんかおかしいって思ってたの。あたしは手札を切り出す。

「いつの間にか部屋に居たり、と思えば急にいなくなったり。朝も昼も夜も、屋敷の中にいるのは見るのに玄関から外に出ていく姿を見た記憶がない。なのに住み込みでなくて側に家があると言ってみたりして。それに、おじいちゃんの時から居るはずなのに年齢が若そうだし」

『常葉』が苗字なのか名前なのか聞きそびれていたけれど、それも当たり前のことだったのだと思ひ至る。出歩く必要がないのも、年齢が若く見えるのも当たり前だ。

「それからね、貴方には足りないものがある」

どこからか桜の花が落ちる。闇の中で咲いていた薄紅は、いつの間にか遅咲きの蕾に戻っているのに。

「それは何？」

ここにきて、やっと常葉があたしに答える。驚きというよりは興味、好奇心。あたしが何を言うのかを心底楽しみにしている顔だ。

だからあたしは、期待に応えて突きつけてやる。

「マヨイよ、『迷い』」

ほう、と相槌を打つ彼。その思考は何処までも分からない。

構わずにあたしは続ける。靄がかってきた意識をぶつけることは、波立つ水面を澄ましその水底を明瞭に見せてくれる。

「不可視の何かに襲われても、躊躇う仕草ひとつ見せない。薊堂がなくなると聞いても、あたしのようなのがいきなり社長になっても同じ。不安も反発も、葛藤すらなかった。――知ってる？

人間って、悩む生き物なの」

そうだ。あたしは悩み、迷っている。

命に関わることでなくてもそうでなくても、どんな些細なことでも、どうでもいいようなことでさえ、悩み、迷う。答えがあるとかないとかは関係ない。最初から持っているひとなんて極稀で、皆自分の踏み出す方向を考えている。

迷うことは邪魔だと思っても、不必要だとは思わない。きっと悩まなければあたしは此処に居ないし、こうした決断も出来なかったはずだから。

顔をあげて、じっと彼を見つめる。仕事用のスーツ、少しだけ長い襟足。日焼けとは無縁そうな白い顔。茶色よりは琥珀に近い瞳。どこからどう見ても二十七、八の日本人男性にしかみえない。だけど。

「人間らしく振舞ってるけど、貴方にはそれが無い」

風の音すらしない中で、あたしのその言葉が強く空気を震わせる。

交差する視線。逸らしてしまえば負けだと思ったから。

足早な夕暮れの光が、常葉の瞳の色を深く深く色付かせ、輝く。琥珀の色は鋭く黄金へと。胸の奥に息が詰まる。窒息しないように、必死に呼吸を意識する。

「まいったなあ。降参だ」

ゆっくりと呼吸を四回数えた頃、彼がやっと嘆息した。

息を潜めていた森の木々たちが途端にざわめきを取り戻した。まるで泡が弾けたように、夕暮れの足が遠のいている。掠れた青色の空に羽ばたきが通り過ぎる。取り巻く気配が動き始めたのが判った。

「僕も随分人間らしくなったと思ってたけど、まだ理解出来ていないようだね」

それから大袈裟に髪を搔く。諦めにも似た、それでいて晴れやかな笑み。悔しそうにも嬉しそうにも見える。

「そうだよ。僕は人間じゃない。そればかりか、キミの御祖父さんや曾御祖父さんの何倍も生きているモノだ」

あたしはやっと肩の力を抜いた。いつのまにか固く抱えてしまっていた鏡をそっと放して、丁寧に抱え直す。

常葉の言葉に意外性はもうなかった。多分、予感していた答えだったから。

人間ではなくて、何倍も生きているもの。ヒトの持ち合わせない力を持ち、操るもの。それが簡単に心の欠けていた部分にかちりと当てはまる。そして思い返してみればあれもこれも怪しい所が多い。

「いつから――は、聞く必要がないね。いつ、確信したの？」

返された視線を、ため息を堪えながら受け流す。

「変だな、と思ったのは何度もあったわ。確信したのは、さっき鳥居を潜って、昨日の夢を思い出した瞬間に。……隠す必要なんて感じていなかったでしょう」

「それもバレてたか」

ちらりと笑って、悪びれることもなく。

本当にあたしは必要なかった。彼には最初から全て見えていて、何をすればいいのか分かっていた。ただし当初と異なっているのは、それを成立させたのは仕事で養った経験ではなくて、元来の彼が持ち合わせていた力に因るということ。

「どうして薊堂にいるのか、聞いてもいい？」

「うーん、なんでだろう」

常葉は一瞬困ったように空を見上げた。正体を知った後でも、こうして表情や気配から感じるものに変化はない。普通に話している分には暢気な好青年だ。

「単に居心地がいいからかもね。勿論、桂一朗も僕のことには知っているよ。今までの浅見家の主は皆伝え聞くことになってる。知らないのは、向き合おうとしなかったキミのお父さんくらいだ

」

最初はキミの祖先に恩があったからだけど、今はもう居ないしね、小さく付け加えた瞳が西日に染まる。まるで金色のように輝いて。

やがて彼はあたしの方へ手を伸ばした。怪訝に見上げる表情に気づいたのか、苦笑う。

「とりあえず、この依頼を終わらせようか」

常葉に従って、あたしと彼は揃って社の前に立った。

あたしの腕の中には牡丹と迦陵頻伽の描かれた鏡。開け放たれた扉の内側には、蝶の紋が入る柄の刀。

まるで何年も何十年も前からそこにあったかのように、静かに。

一瞬しか見ていないけれど、この扉を開けたのは常葉だ。鳥居をくぐった瞬間に広がった闇一違う。あの時鳥居の内側は確かに闇の中にあった。別の時間なのか、別の次元なのか、幻想か、確かに闇だったのだ。彼はその中に平然と立っていて、あたしが前のように掻き消えずに居られたのも彼のお陰。いまはそれを理解していた。

目を閉じればあの蒼い光がちらついている。

鮮やかな、彼を包む炎。見覚えのある強い色。

「このふたつは番(つがい)だったんだ」

常葉は、穏やかに低い声で呟く。その指の先を黙って眺める。

「けれどふたつとも、信仰という光から遠ざかる程に力が弱まってしまった。鏡に至っては殆ど残っていない」

「探していたのは、刀のほうね」

「そうだね。最後の力を振り絞って、鏡を探していた」

ひやりとしたその表に触れてみる。白銅の輝きは褪せていないように見えるのに、物の魂は褪せてしまったのだろうか。すぐ傍の声が哀しげに響く。

「戻してももう永くはないだろう。だけどそれでも、彼らは共に最期を迎えたかった」

ああ、だから『返して』だったのね。あたしは嘆息する。

此処に閉じ籠ったのは、異常を知らせるためだったのだと常葉が教えてくれる。まるで見聞きしたかのように。いいえ、事実見聞きしたのだろう。この御神体の魂から。

開かない扉の内に何かが或るのだと、この社を守るはずの華崎家へ発した警鐘だった。自身の魂を削りながら、かたわれを探しながら。そしてやってきたのが、あたしたち薊堂の面子だった

。一瞬でも一緒に居たいから、愛しいものを探す。

待ち侘びるものが、無だとしても。

あたしは白銅鏡を三足の鏡台に納めた。その刀に寄り添うように。途端にふうっと涼しげな風が抜ける。髪を揺らすその夕風が、まるで安堵の溜息のように感じられた。

「祝詞は全部覚えている？」

頷けば、常葉が鷹揚と微笑む。

「じゃあ、納めてあげてくれないかな」

彼は数歩下がり、あたしの視界から外れる。今対峙するのは社。ひいては刀と鏡。夕闇の迫る空の下には、ただそれだけ。

目を閉じて、大きく息を吸う。しなやかな森の気配が全身に渡る。心をカラにするために、背後に居るはずの彼を振り返る。

最後に、ひとつだけを尋ねたくて。

「それで、貴方は誰なの」

見守っていたらしい彼は、一瞬あたしの視線に怪訝そうな表情を浮かべた。それから、その瞳を穏やかに揺らめかせて呟いた。

「『トキワギツネ』」

耳慣れない言葉。そうして微笑む。

その顔は、馴染んだ表情でしかないはずなのに。

「狐だよ」

「……やっぱり」

そう返すのがやっとだった。

「かけまくもかしこき、いざなぎのおおかみ」

社の中に寄り添う刀と鏡。

身幅の広い、鍔に胡蝶の紋の入る日本刀。

表に獣と八重牡丹の刻まれた白銅鏡。

手を合わせると、たちまち森の空気が揺らいだ。それは拒絶なのか、抵抗なのか。周囲を巻き込むように闇が、無が、延々と裾を広げようとしている。

「つくしのひむかの、たちばなのをとのあわぎはらに」

手が震える。言葉が滞る。たった数度呼吸を繰り返したただけなのに、汗が滲んでいる。

暑いんじゃない、冷たい汗。闇を思い出す恐怖。虚無が鼻先まで近づいている。慌てて紡ぐ祝詞で、かろうじて飲み込まれるのを防いでいた。

昨日読み上げたものと種類も違えば重さも違う。あれ程度では効きもしなかつただろうと、比べなくても察知する。きっと、彼がいなければ競り負けていた。

我知らず後ずさる。こんなことだったら、ちゃんと祖父に祝詞を教わっておくんだった。この数日間、付け焼刃程度に暗誦した言葉ではどうしても心許ない。深く深く息を吸って、自分を思い出す。

と、足許がぐにゃりと揺らいだ。緊張の糸が歪む。

――怖い。

たたらを踏むあたしの肩を、すぐ後ろから支える掌がある。

「翠仙ちゃん」

声だ。たった一週間一緒に居るばかりの、それでいて聞き慣れてしまった声。それはやわらかく落ち着いていて、あたしの足許を確かなものに回復させる。いつの間にか汗で歪んでいた視界がふわりと澄んでいく。

あたしは弱く微笑んだ。

「ありがとう。ちょっと疲れただけ」

振り仰ぐ彼の、常葉の顔。眉間に寄せられた皺は心配の色かもしれない。

うん。大丈夫。

あたしは今、ひとりじゃない。

あの闇の中のように、独りで消える恐怖を憶える必要はないんだ。

後押しする体温を確かめながら、真直ぐに前を見る。

「一一きこしめせと、かしこみかしこみももうす」

暗闇が、しんと澄み渡っていく。

殆ど日の光を取り戻した社の前。長い祝詞を唱え終わって、ふっと息をつく。静まった二つの奉納品、いや、御神体。輝きを失ったままのそれらを眺めて、言い表せない不安に苛まれる。

まるで抜け殻のような。特に鏡のほうは、何のあたたかさも感じられない。

遅かったのかもしれない。灯火を削って探し回った彼女の情慕も、静かに待ち続けたはずの彼女の魂も。

落胆を見越してか、常葉が助け舟を出してくれる。

「ウブスナカミノハライは唱えられる？」

「うぶすなの一一？」

掠れ声で問い返すあたしに代わり、彼が言葉を造った。

「高天原に神留座す、皇親神漏岐神呂美の命以て」

歌うようなしなやかな祓いの言霊。それは聞き覚えがあって、無理矢理に記憶の中から引きずり出して、唱える。

「あ一一『かみあかりに、いついろのみてくらを、たてまつり』」

ざわり、木々が唸る。振り返りたい気持ちを押しとどめて、自らの瞳はふたつの御神体へと注ぐ。

ゆるゆると清浄な白色を取り戻していくのが分かった。煤けていた闇が剥がれ、その内に眠っていた光がこぼれる。

それは魂の色だった。

「下三千一百餘神鎮守氏神速に納受て」

「たいらげく、やすらげく。すめかみ、あまくだりまつる」

曖昧で自信なく小さくなる声を補うように、常葉があたしよりもずっと丁寧にやわらかに言葉を述べていく。それは祖父の言葉によく似ていた。不確かな記憶を呼び起こすには充分だった。

それでもあたしなんて完全とは言えないけれど。

助けてもらいながら、早くひとりで唱えられるようにならなければと漠然と誓った。

まるで鈴の音が響くかのように、清められる空気。それを震わせるのは、今や祝詞を謳う声のみ。

気がつけば、辺りは白い光に包まれている。

木漏れ日のような、昼間の月の輝きのような、しずかな温かさ。

いつかの日の出のようなやわらかい色の中に、いつのまにか二人の女性が佇んでいる。

どこことなく似た気配を持つ、真っ白な女性。ゆるく結わえた髪、白無垢のような内掛け、指先までが光るように白い。

その髪には簪。ひとりは舞蝶の、ひとりは牡丹の。それぞれを耳の横に飾っている。彼女達は寄り添うように存在し、穏やかな微笑を称えていた。

やがて着物の裾からふわふわと光に溶けていく。

それはきっと、後悔などではなく。

「やおよろずのかみたちもろともに一一きこしめせと、もうす」

言葉の最後を告げる頃には、辺りはもう日常に戻っていた。

さわさわと踊る新緑。緑に揺られる社。

ふっと手を解くその瞬間、かすかに有難うと聞こえた気がした。

「これで、終わりなのね」

平穏を取り戻した祠の前で、狐が――常葉が笑う。

「初仕事としては上出来じゃないかな」

ふと振り返る。その表情にも佇まいにも何ら変化は見られなくて、先刻の言葉が冗談だと言われれば騙されることが出来るくらいあまりに人間らしかった。

我知らずその足許を見下ろした。南天を過ぎた太陽は少しずつ影を伸ばしていた。その中に耳や尾がないだろうか、目が光らないだろうかと探しそうになる自分がある。

あたしの心の中を覗いたかのように、彼は静かに目を細める。

「気持ち悪い？ 出て行けというなら、僕はそれでも構わないよ」

それを真直ぐと睨み返して、それから興味が無い風を装って逸らした。彼が視界から消えて、確かめることが出来るのは声だけになる。

「言わないわよ、そんなこと。常葉はあの場所がいいんでしょ」

だって、その表情がどこか寂しそうに歪むものだから。

「そう言ってくれと、とても助かる」

振り向くことはしない。彼は笑っているだろうか、安心しているだろうか。

もしかして悲しんでいるかもしれない。自分だけの居場所だったあの場所に、また人間が入り込むことを。

それとも、喜んでくれるだろうか？それともやっぱり、迷惑に思うだろうか。

ふと、扉の閉じた祠を見る。ただの器に戻ってしまうであろうふたつの御神体。人間の心が離れて、息づいた魂さえ離れてしまうもの。

もしかしたら、あの場所だって、いずれ埃に塗れて朽ちていくのかもしれない。その前に取り潰されて跡形もなくなってしまうのかも。それは時間の経過だ。色も形もいつかは薄れ、見えなくなっていく。

結局のところ、何もかもが真新しいあたしが簡単にどうこう出来るものではないだろう。祝詞も満足に謳えない、親の掌の上に座ったままの幼いあたしには。

だけど、今は。

「……帰りましょう」

常葉の耳に届くかも分からないくらいに、小さな声で呟いたその言葉。

振り向いて見上げる。覗き込んだ眼が西日で金色に染まった。石段を降りていく背中を、見失わないように懸命に追いかけていく。

もう、足を取られることはない。

刀と鏡を納めた社の、観音開きの扉にはしっかり錠前をかけた。

鍵は華崎さんへ託した。これから末永く手入れを怠らないことを頼み、もう二度と放してしまわないように。

きっとあのふたつの魂の寿命はそう長くない。もう社を閉ざしておく力は無いし、その意思を氏子へと伝える術も残っていないだろう。それでも、眠るように器だけに戻った後にどんな力も存在しなくとも、祈り願うという心は土地にも人にも平穏を導いてくれる。

今後、あれらの『妙なこと』が起こる心配はないでしょう。常葉の説明にじっと耳を傾ける華崎家の面々。祖父孫それぞれの、何かを察するような穏やかな微笑が瞳の奥に焼き付く。

「――ありがとうございました」

伊瀬さんが深々と首を垂れる。

「これで、安らかになれるはずです」

その言葉は安堵。先祖が奉って来たものを正しく保てることへの安堵かもしれない。或いは、幼い頃に見た彼女への。

呼んでもらったタクシーの後部座席に身体を沈める。同時に自分の身体が酷く重いことに気がついた。言霊を創るのは膨大に体力と精神力を必要とするのだと、改めて噛み締める。

遠ざかっていく森と、緑に囲まれた屋敷の影。バックミラー越しに眺めれば、見送りに頭を下げる伊瀬さんの姿が遠ざかっていく。あたしの意識と共に。

――いつの間にか夢の中にいる。

ううん。それは夢なのか、遠い思い出なのか。あたしは深い森の中において、心細さに涙を堪えていた。

耐え切れずにしゃがみこむ幼い少女を木漏れ日の中に見た。声をかけようか戸惑ううちに光が強くなっていく。

いつしか、涙を溜めているのは自分だった。物心ついたばかりほどのあたしが、祖父の目から離れて迷い込んだ鎮守の森。

好奇心で探検に来たはずの勇ましい少女はもう存在しない。そこにいるのはただ、大好きな祖父父母と両親にもう一度会いたいと願う三歳の少女。

ああ、あの時は本当に最期の別れだと思っていた。神社の敷地の中の迷子なのに、小さな少女には今生の別れに感じていたんだ。

それをありありと思い出していると、新緑の陰がくらりと明るんだ。

太陽の白ではなく、蒼色の灯火。

振り向いた先には一人の青年がいる。

当時のあたしには見覚えのないひと。そしてその後も、幼い頃に逢ったことさえ薄れてしまった、薄色のスーツに黒髪の男。

『迎えに来たよ』

差し出されたてのひらが、あたしの涙を留める。首と袖口の釦がきっちり留められているのを見て、夏なのに暑くないのだろうかと思当はずれなことを思った。

初夏だった。引かれる指先が冷たく心地良い。薄青のワイシャツが日差しに優しくかった。

『さあ、お祖父さんのところへ帰ろう』

柔らかな微笑みが、あたしの心を穏やかにさせる。

ふと、足許に目を向ける。彼の影は、まるで耳と尾のある獣のように見えて。

気がつけば彼の背に揺られている。あたたかく大きな背中は迷子の少女を眠りに誘った。

そしてそのゆりかごは、今までに何度も覚えのある背中。涙はとうに引っ込んで、規則的に草を踏み分ける足音が心音と重なっていく。

押し付けた頬から伝わる、なだらかな呼吸。時々呼びかけてくれるあたしの名前。森のさざめき。日の光に紛れる彼自身の蒼色。

彼の背に揺られている。

そっと開いた瞼の先、彼のスーツの色が見えた気がしてデジャヴを覚える。

大きかった背中は先刻よりずっと現実的で。それでも頼ってしまえるような広さを備えている。

うとうとと、睡魔に負けて夢の中に逃げる。

一体何処までが思い出で、何処までが夢で、何処までが現実なのか。

比べられないままに、事務室のソファに横になっている自分が残った。

8. 新しい居場所

桜の花弁が散っていく。

三階から見下ろす窓の外。見えるのは稲荷の小社と、裏の家から舞い込んでくる薄紅の嵐。最近では下ろしっぱなしだった自分の黒髪をきっちりとひとつに結って、重たい紺色のセーラー服に袖を通した。

清しい朝だ。今日は何故だか普段より三十分も早く目を覚まして、珍しく緊張でもしているのだろうかと思ひをひねる。

「おはよう」

階段を下りていけば助手で部下で職場の先輩の彼が出迎えてくれる。掃除の時だけ首の後ろで縛る余り毛が、獣の尾のようにふわりとしなつた。

「おはよう。朝食出来てるよ」

「ありがと」

トントンと軽快に、水拭きに精を出す彼の横をすり抜ける。扉を開けて漂う、焼きたてのブレッドとバターの匂い。それから目を奪われる、オムレツにイタリアンサラダ。

先刻までカーペットの手入れをしていたはずの彼がいつの間にかテーブルを整えてくれる。あたしが起きてきたら朝食を出す。この手順もすっかり板について来ているようだった。

「そういえば、伊瀬さんからお礼の手紙が来てたよ。お陰様で何事もないらしい」

林檎に果物ナイフを入れながら彼が言う。あたしは小さく頷く。

「そう。良かった」

それから自動的に先日の華崎邸での遣り取りを思い出していた。

彼――常葉は『この場所を出て行くべきか』と問うたけれど、反対にあたしが居てもいいのかということを確認するのを忘れていた。

こうして朝食を用意してもらったり、相変わらず執務机に座ることを赦してくれるのだから信じてもいいのかもしれない。勿論、否定が無いだけで肯定とは言い切れない。

それに、あたしが幼いことに今の所変わりはないけれど。

そう、あたしは何も変わらない。周りの環境ばかりが目まぐるしく変化していく。

例えば同じ学校に向かうにも関わらず、今日からはもう違う教室を目指すように。例えば新しく始めたバイトの助手が実は人間でないように。

それから――

「それから、」

思考を遮って彼の声がする。自分の言葉が洩れてしまったのかと、一瞬だけどきりとする。

「先代の社長からも連絡が」

「おじいちゃんから？ どうして？」

思わぬひとの話題になって聞き返す。今頃は本家の縁側で庭の木々でも眺めている時間かもしれない、あたしが一番尊敬しているそのひとを思い浮かべる。

「浅見家の孫娘は――新しい社長は元気でやっているかって」

「ねえ、それって……」

言葉を喉に詰まらせる。とっさに顔を上げれば、どこまでも真直ぐな眼があたしを見ていた。皮肉でも揶揄でもない、真摯な琥珀色。

新しい、『社長』。

ふっと緩んだ口元にその真意を知る。

留めていた手を再開させ、空になった食器を下げていく。代わりに真っ白なカップが前に出て、サイフォンを傾げようとするのを大慌てで静止した。

「ねえ、珈琲じゃなくて紅茶にしてくれる？」

きょとんとした表情にニヤリと笑い返す。仕返しになるはずはない。我ながら、少し無理のある話題転換だった。

「飲めないのよ、珈琲。苦いじゃない」

――照れ隠しだとバレなければいいのだけれど。

「全く、手のかかる社長さんだね」

もう一度改めて口にした彼はやっぱり微笑んで。

目を伏せたままなのは、もしかしたら涙目がちになっているあたしを見ないように逸らしているのかもしれない。

あたしは何も変わらない。変わるのは環境ばかり。

だから今はおいて行かれないよう、懸命にその背中を追いかける。たとえ上手に前に進めなくても、息を深く吸って辺りを見回そう。

この小さな事務所の、幼い社長。それを支えてくれる唯一の社員。

いつかはあの背中に追いつけるように。そして、彼らから認めてもらえるように。

始まりは、高校二年の春のことだった。
桜の薄紅が、ふわふわと窓の外を彩っていた。

ふわふわと。

やわらかな日差しが、あたしの頬を撫でていく。

四月の午後、春眠暁を覚えず。それどころか、黄昏さえもままならないほど。ふわふわと心地よい身体の沈み具合と、疲弊した脳に思考。目を閉じれば薄い暗闇。

喧騒が遠い静かな部屋の中で午睡を嗜む。足許に放り出した鞆が少し邪魔で、こっそり足の脛で押し出す。

「一一仙、翠仙ってば」

そう、あたしの睡魔を邪魔するものは何もない。唯一、誰かが淹れた紅茶の香りが鼻をくすぐるけれど一一

「聞こえてるんだらう？ 翠仙」

そのうちに、遠くにあったはずの音がすぐ側まで近寄ってきて、夢が遠ざかったのかと錯覚するものの、どうやら耳元であたしを呼ぶ誰かがいるらしい。

勿論、誰か、なんてここには他に一人しかいないんだけど。

ああ違う、一人じゃなくて、厳密には一匹。

「いい加減起きてよ。もう夜だよ。それに、眠いなら上に戻ってちゃんと布団で寝るべきだ」

「あーもう、うるさいわね。ソファが気持ちいいんだから放っておいて」

薄く目蓋を開いて、ロクに彼の顔も見もしないで反論する。ちらりと見えたのは相手の琥珀の眼が困惑色に染まっている様子だった。

セーラー服のまま、用意周到携帯済みのブランケットを布団代わりに引き上げる。ごろり指定鞆が転げ落ちる気配がしたけど、落下する音は続かなかった。助手が拾い上げたに違いない。

翠仙、と、根気よく呼ぶ声に免じて顔を上げる。

「それに。あたしはこの社長なの。何処で何しても自由。違う？」

一瞬だけ、面食らったような顔つき。それからすぐに、嗚呼、と溜め息。なにやら芝居がかった仕草で少しの間天井を見上げてみたりして。

「なんか段々分かってきたよ。もしかして、今までは猫被ってたのかな」

「お互い様でしょ」

ふふん、と得意げに鼻で笑えば、彼も負けじと口角を上げる。

「残念ながら僕は狐だからね」

「それならあたしは、さしずめ虎ってところかしら」

「虎の威を借る何とかって？」

遣り取りの隙間に沈黙。次の出方を伺うお互いに気づいて、思わずくすりと吹き出す。

そうね、虎も猫も同じなら、せめて心だけでも虎にならきゃ。

きっと萎縮してるだけじゃ、この仕事は勤まらない。まだ半人前でも、正式な社長じゃなくたって、他所から見ればあたしもここの社員なのだから。

そして、虎の前にはいつも狐。

来客を知らせるベルが鳴る。助手がそれよりも早く立ち上がって、応接室の扉を開く。

「翠仙。下にお客が来てるんだけど、通してもいい？」

再び覗き込むその横顔に、あたしはやっとソファから身体を離す。

猫のように転寝から抜け出して。

彼の、常葉の引き連れる来客に笑顔を返す。

その一言が、あたしの――あたしたちの、本当の第一歩だった。

「――いらっしゃいませ。あやかしごと承ります。薊堂へ、ようこそ」

《終》

薊色花伝

『よろずや薊堂』シリーズ①

<http://p.booklog.jp/book/44031>

著者：朝斗

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asatoiro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44031>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44031>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.